

罵詈若シハ侮慢シタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第六章 燒燬毀壞

第四百四條 軍人火ヲ放テ艦船屯營造船所造兵所武庫火藥庫其他戰闘ノ用ニ供スル屋舎若クハ軍用ニ供スル物品ヲ貯藏シタル倉庫ヲ燒燬シタル者ハ死刑ニ處ス

第四百五條 軍人火ヲ放テ露積シタル兵器彈藥機械船具糧餉其他軍用ノ物品ヲ燒燬シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

- 一 敵前若クハ軍中ニ在テハ死刑ニ處ス
- 二 其他ノ場合ニ在テハ重懲役ニ處ス

第四百六條 軍人火藥其他激發ス可キ物品又ハ蒸氣罐ヲ破裂セシメテ前二條ニ記載シタル物件ヲ毀壞シタル者ハ前二條ノ例ニ照シテ處斷ス

第四百七條 軍人艦船屯營造船所造兵所武庫火藥庫其他戰闘ノ用ニ供スル屋舎若クハ軍用ニ供スル物品ヲ貯藏シタル倉庫ヲ毀壞シタル者ハ重懲役ニ處ス

第四百八條 軍人兵器彈藥機械船具糧餉其他軍用ノ物品ヲ棄毀シタル者ハ一月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第四百九條 軍人官給ノ物品ヲ棄毀シタル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第七章 擅權

第五百十條 司令官講和ノ告示若クハ停戰ノ命令ヲ受ケタル後仍ホ戰鬪ノ所爲ヲ止メサル者ハ死刑ニ處ス

第五百十一條 司令官命令ニ背キ若クハ權外ノ事ニ於テ已ムコトヲ得サルノ理由ナク擅ニ艦船若クハ兵隊ヲ進退シタル者ハ死刑ニ處ス

第八章 違令

第五百十二條 司令官艦船若クハ兵隊ヲ率并故ナク其守地若クハ配置セラレタル地ヲ離去シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

- 一 敵前ニ在テハ死刑ニ處ス
- 二 軍中ニ在テハ一年以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ劓官ヲ附加ス
- 三 其他ノ場合ニ在テハ二一年以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ劓官ヲ

附加ス

第百十三條 將校艦船ノ直ニ在テ其直ヲ離レ若シハ守兵守所ヲ離レ
其他軍人緊要ノ職務ニ服シ擅ニ其職務ヲ離レタル者ハ左ノ區別ニ
從テ處斷ス

一 敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

二 軍中又ハ擱岸坐礁其他艦船救護ノ爲メ緊要ノ方略ヲ爲ス時ニ
在テハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三 其他ノ場合ニ在テハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ
剝官ヲ附加ス

第百十四條 將校艦船ノ直ニ在テ睡眠若シハ酩酊シテ之ヲ省セサル
者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二 軍中又ハ航海中ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百十五條 守兵守所ニ在テ睡眠若シハ酩酊シテ事ヲ省セサル者ハ
左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二 軍中ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

三 其他ノ場合ニ在テハ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百十六條 軍人艦船ノ擱岸坐礁其他危險ノ時ニ當リ司令官ノ命ヲ
待タズ其艦船ヲ退去シ又ハ其命ニ依リ艦船ヲ退去シタル後集合ノ
場所ニ來ラス若シハ擅ニ其場所ヲ離去シタル時ハ三月以上三年以
下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第百十七條 軍人守兵ヨリ告示スル禁令ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ
從テ處斷ス

一 敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ
附加ス

二 軍中ニ在テハ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ
附加ス

三 其他ノ場合ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス
第百十八條 軍人戰鬥ノ號報アル時故ナク其集合ニ來會セサル者ハ

二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第一百九條 軍人允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナシ歸着ノ期限ニ後レ十日ヲ過キタル者ハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十條 歸休若クハ非職ノ軍人徵召ノ命ヲ受ケ故ナシ到着ノ期限ニ後レタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 出師ノ時ニ在テ五日ヲ過キタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二 其他ノ場合ニ在テ十日ヲ過キタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十一條 新募ノ兵徵集ノ命ヲ受ケ故ナシ到着ノ期限ニ後レタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 出師ノ時ニ在テ五日ヲ過キタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二 其他ノ場合ニ在テ十日ヲ過キタル者ハ十一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス

比

第二十二條 司令官事變ニ因リ已ムコトヲ得ズ暗號記號ヲ改メ又ハ配置セラレタル地若クハ其命セラレタル所ノ事ヲ變更シ直チニ之ヲ申報セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十三條 軍人命ヲ受ケス艦船内ニ商貨ヲ積載シタル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス但破壊若クハ危險ニ罹リタル船舶ノ商貨ヲ保護スル爲メ移積シタル者ハ此限ニ在ラス

第二十四條 守兵妄リニ銃砲ヲ發シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十五條 軍人禮砲號砲其他空砲ヲ發スル時ニ當リ彈丸銅鐵瓦石等ヲ裝填シテ發射シタルモノハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

此條ノ罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二十六條 軍人政治ニ關スル事項ヲ上書建白シ又ハ講義論說シ若シハ文書ヲ以テ之ヲ廣告スルハ者一月以上三年以下ノ輕禁錮

ニ處ス

第二百二十七條 軍人敵前軍中ニ在テ造言飛語ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二百二十八條 軍人俘虜降人ヲ逃走セシメタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

看守護送者之ヲ犯シタル時ニ重禁錮ニ處ス

第二百二十九條 軍人俘虜降人ヲ逃走セシムル爲メ兵器其他ノ器具ヲ給與シ若クハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

看守護送者之ヲ犯シタル時ニ輕禁獄ニ處ス

第二百三十條 軍人前二條ニ記載シタル所ノ輕罪ヲ犯サントシテ未ダ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百三十一條 軍人俘虜降人ヲ看守若クハ護送シ懈怠ニ因リ其逃走ヲ致シタル者ハ十一日以上一月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百三十二條 軍人逃走ノ俘虜降人ナルヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ

隱避セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

但犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

第九章 逃亡

第二百三十三條 軍人擅ニ艦船屯營本隊若クハ職役ヲ離レタル者ハ左ノ區別ニ從ヒ逃亡ト爲シテ處斷ス

一 敵前ニ在テハ輕禁錮ニ處ス

二 軍中ニ在テ三日ヲ過キタル者ハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三 其他ノ場合ニ在テ六日ヲ過キタル者ハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二百三十四條 軍人四人以上相黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ニ在テハ首魁ハ死刑ニ處シ其他ノ者ハ輕禁錮ニ處ス

二 軍中ニ在テ三日ヲ過キタル首魁ハ輕禁獄ニ處ス其他ノ者ハ六

月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三 其他ノ場合ニ在テ六日ヲ過キタル者ハ首魁ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ其他ノ者ハ二月以上一年以上以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第三百三十五條 軍人敵ニ奔リタル者ハ死刑ニ處ス

第十章 詐偽

第三百三十六條 軍人敵地若クハ敵情ヲ探偵スルノ命ヲ受ケ詐偽ノ報告ヲ爲シタル者又ハ戰場ニ在テ命令ハ詐リ傳ヘタル者ハ五月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十七條 軍人糧食ノ支給ヲ掌リ健康ヲ害ス可キ食料飲料ヲ配付シタル者ハ輕懲役ニ處シ因テ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百三十八條 海軍醫官其職務ヲ以テ疾病傷痕及ヒ身體強弱ノ偽證ヲ爲シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ其囑託ヲ爲シタル軍人亦同シ

第三百三十九條 軍人疾病ヲ作爲シ身體ヲ毀傷シテ兵役ヲ免ル、トナ

圖リタル者ハ一月以上一年以上以下ノ重禁錮ニ處ス

○第二款

第一節 陸軍刑法海軍刑法新舊比照

○十五年一月第四號布告

陸軍刑法海軍刑法第二條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ規則ニ從フヘシ

第一條 新法ト舊法トノ刑ヲ比照スルニハ別表ニ從フ

第二條 舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期内ニアル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過クルコトヲ得ス(舊法ニ於テ百日ニ該ル者新法ニ照ラシ二月以上四年以下ノ禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ二月以上百日以下ニ處スルノ類)

若シ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ(舊法ニ於テ杖五十錮四十二日若クハ閉門半年後停官ニ該ル者新法ニ照シ二月以上三年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ杖五十錮四十二日若クハ閉門半年後停官ニ處

スルノ類)

第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ過クルコトヲ得ス(舊法ニ於テ一年以上三年以下ニ該ル者新法ニ照シ三月以上四年以下ノ禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ三月以上三年以下ニ處スルノ類)

若シ舊法新法ノ刑其短期等クシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ

第四條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ普通刑法第三十一條第二項第三項(位記貴號ヲ除ク)第四項第五項及ヒ第四十三條ヲ除クノ外附加刑ヲ科セス

第五條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ輕罪ノ刑ニ處スル時監視ハ之ヲ附加セス

第六條 新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑トス(別表)

刑期	將校刑名	下士刑名	卒夫刑名
----	------	------	------

十年	流刑	同	同
三年	閉門半年後奪官	徒三年	同
二年	奪官	徒二年	同
一年	閉門半年後回籍	徒一年	同
百日	回籍	戒役	同
九十日	閉門半年後停官	錮三十五日後黜等	杖五十錮四十二日
八十日	閉門四十二日後停官	錮 ^{三十日} 後降等一年半	杖四十錮三十五日
	停官	錮 ^{三十日} 後降等一年半	杖三十錮二十八日
七十日	降官	降等一年半	笞三十錮二十八日
六十日		降等一年	笞二十錮二十一日
五十日			笞十五錮十四日
四十日	閉門九十八日	錮四十二日	同
三十日	閉門四十九日	錮三十五日	同

二十日	閉門三十五日	錮二十八日	同
十一日	謹慎三週日	同	同
	謹慎二週日	同	同

第二節 舊軍律ト普通刑法トノ新舊比照

○十五年四月第二十號布告

舊軍律及ヒ普通刑法共ニ罪名アリテ所犯刑法施行前ニ係ル者ハ本年(一月)第四號布告ノ例ニ準シ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス可シ但罰金科料ニ該ル者ハ明治十四年(十二月)第八十一號布告ニ依ルヘシ

第三節 罰金科料

○十六年十一月第三十七號布告

陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコトヲ得

第四節 海軍准士官犯罪

○十六年一月海軍省丙第六號達
海軍准士官海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル時ハ總テ將校ト同シク處斷スヘ條此旨相達候事

海軍省

海軍准士官海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル時ハ總テ將校ト同シク處斷スヘキ儀ト可相心得此旨相達候事

明治十六年一月十九日

第四節ノ二 陸軍上等卒犯罪

○十五年八月司法省丁第四十一號達

今般太政官ヨリ左ノ通御達有之候條此旨相達候事

司法省

陸軍上等卒ニシテ刑法特ニ官吏ノ爲メニ定メタル罪ヲ犯シタル時ハ都テ官吏ニ準シ候儀ト可相心得此旨相達候事

明治十五年八月十五日

第四節ノ三 憲兵卒犯罪

○十五年十二月第七十三號布告
 憲兵卒其職務ニ關シ罪ヲ犯シタル時ハ官吏犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス
 憲兵卒ノ職務ニ對シ罪ヲ犯シタル者ハ官吏ニ對スル犯罪ノ例ニ照シ
 テ處斷ス

○第三款

第一節 軍人軍屬賭博犯罪處分細則

○十七年四月丙第六十八號達

軍人軍屬賭博犯罪處分ノ義左ノ通被相達候コ付右處分細則別紙ノ通相
 定候條此旨相達候事

海軍省

本年第一號布告賭博犯罪處分規則ニ依リ處分スヘキ者軍人軍屬ニ係ル
 時ハ憲兵部ノ處分ニ付シ該部ノ處分ニ付スルヲ得サル場合ニ在テハ
 陸海軍法衙ノ處分ニ付セシメ候條右規則施行ノ方法細則ハ其省ニ於
 テ便宜之ヲ定ムヘシ此旨相達候事

但軍人軍屬ニアラスシテ軍人軍屬ト共犯ニ係ル者ハ各其事件ヲ管

○海軍省
 軍人軍屬ニ係ル者ハ各其事件ヲ管
 博事取調中免職
 セラモトキ軍屬ナリ
 其犯スル者ハ軍屬トシテ
 シタルモトキ軍屬トシテ
 上ハ常ト然トシ
 處分シテ然トシ
 一月二十七日
 指令(電報)
 二月十七日
 二犯分ノ附儀ハ
 博通分ノ附儀ハ
 伺治通分ノ附儀ハ

理ス可キ官司ノ處分ニ付スル儀ト心得可シ

明治十七年三月廿四日

軍人軍屬賭博犯罪處分細則

第一條 軍人軍屬ノ賭博犯ハ憲兵部ノ處分ニ付スト雖モ該部ノ處分

ニ付スルヲ得サル場合ニ在テハ軍法會議ニ於テ之ヲ處分シ又輕罪

以上ノ罪ト俱發ニ係ル時モ軍法會議ニ於テ處分ス可シ

第二條 賭博犯ヲ以テ監獄ニ在ル者ハ海軍監獄ノ規則ニ照準シ其取

扱ヲ爲ス可シ

第三條 懲罰ニ處セラレタル者ハ重禁錮ノ囚ニ準シ服役セシム可シ

第四條 過料ニ處セラレタル者ハ二十日以内ニ之ヲ納完セシム若シ限

内納完セサル者ハ一圓チ一日ニ折算シテ懲罰ニ換フ其一圓ニ滿タ

サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス但納完期限ヲ待タズ懲罰ニ換フル

ヲ得

懲罰ニ換ヘタル者ト雖モ限内更ニ過料ヲ納メタル時ハ其經過シタ

ル日數ヲ扣除シテ懲罰ヲ免ス親屬其他ノ者代ヲ納メタル時亦同シ

第五條 懲罰ノ期限ハ宣告ノ日ヨリ起算シ放免ノ日ハ期限ニ算入セ
ス其一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ但他
罪ト俱發ニ係ル時ハ懲罰執行ノ日ヨリ起算ス

第六條 懲罰人悔悟悔改ノ狀アルトキハ監獄署長ヨリ 鎮守府監獄署
長ハ其長官ヲ
經由ス 其犯由及悔改ノ情狀等ヲ海軍卿ニ具申シ減免ヲ請フヲ得
ヘシ

第二節 軍人夜中ノ乘馬

○十五年四月第二十二號達

刑法第四百貳拾七條第三項夜中燈火ナクシテ車馬ヲ疾驅スル者ト有
之候處軍人制服ヲ着用乘馬シタル者ハ右ノ限ニ無之候條此旨相達候
事

○第六編 治罪

第一類 治罪法

○第一章

第一節 治罪法

○明治十三年七月第三十七號布告

治罪法目錄

第一編 總則

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第二章 違警罪裁判所

第三章 輕罪裁判所

第四章 控訴裁判所

第五章 重罪裁判所

第六章 大審院

第七章 高等法院

第三編 犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審

第一章 搜查

第一節 告訴及ヒ告發

- 第二節 現行犯罪
- 第二章 起訴
 - 第一節 檢察官ノ起訴
 - 第二節 民事原告人ノ起訴
- 第三章 豫審
 - 第一節 令狀
 - 第二節 密室監禁
 - 第三節 證據
 - 第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質
 - 第五節 檢證及ヒ物件差押
 - 第六節 證人訊問
 - 第七節 鑑定
 - 第八節 現行犯ノ豫審
 - 第九節 保釋
 - 第十節 豫審終結
- 第四章 豫審上訴
- 第四編 公判
 - 第一章 通則

- 第二章 違警罪公判
- 第三章 輕罪公判
- 第四章 重罪公判
- 第五編 大審院ノ職務
 - 第一章 上告
 - 第二章 再審ノ訴
 - 第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
 - 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
- 第六編 裁判執行復權及ヒ特赦
 - 第一章 裁判執行
 - 第二章 復權
 - 第三章 特赦
- 第一編 總則
 - 第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルヲ目的トスル者ニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢察官之ヲ行フ
 - 第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス
 - 第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ

在ラス

第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラス公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得但法律ニ於テ其裁判所ニ私訴ヲ爲スヲ許サル場合ハ此限ニ在ラス

又私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

第五條 公訴私訴ノ裁判ハ管轄裁判所ニ於テ現ニ施行スル法律ニ定メタル訴訟手續ニ從ヒ之ヲ爲ス可シ

第六條 刑事裁判所又ハ刑事裁判所ト民事裁判所トニ於テ公訴私訴並起ル時ハ公訴ノ裁判ニ先テ私訴ノ裁判ヲ爲ス可カラス若シ賠償返還ノ言渡アリタル後刑ノ言渡アリタル時ハ共ニ其效ナカル可シ

第七條 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢察官ノ起訴アルニ非サレハ願下ヲ爲シ更ニ刑事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得テ願下ヲ爲シ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得

第八條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムルノ妨礙ト爲ルヲナカル可シ

第九條 公訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被告人ノ死去

二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ被害者ノ棄權又ハ私和

三 確定裁判

四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

五大赦

六 期滿免除

第十條 私訴ヲ爲スノ權ハ左ノ條件ニ因テ消滅ス

一 被害者ノ棄權又ハ私和

二 確定裁判

三 期滿免除

第十一條 公訴期滿免除ノ期限左ノ如シ

一 違警罪ハ六月

二 輕罪ハ三年

三 重罪ハ十年

第十二條 私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判

所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタル時ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ

トナラサル場合其
 損害ノ賠償ヲ命
 職務ノ以テ爲シ
 要ルモ第十七條
 同法第七條ニモ
 準スルハ同條ニ
 被檢候得共同條
 警察官ト指定シ
 一般官ニ適用ス
 爲念一文ト難認
 指令月廿七日
 同令ノ趣治罪法
 十條ニ掲載シ
 クル官吏ト均シ
 ケサル儀ト心得
 明治十六年十
 月八日

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ
 一年ト稱スルハ曆ニ從フ
 第十九條 此法律ニ定メタル期限ニハ陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加
 フ八里ニ滿サル者ト雖モ三里以上ナル時亦同シ
 島地又ハ外國トノ路程ノ猶豫ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム
 第二十條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタ
 ル時ハ特別ノ場合ヲ除ク外其權ヲ失フ可シ
 第二十一條 訴訟關係人ハ裁判所々在ノ地ニ住シサル時ハ其地ニ假
 住所ヲ定メ書記局ニ届置ク可シ否ラサル時ハ書類ノ送達ナシト雖
 モ異議ヲ申立ルコト得ス
 第二十二條 此法律ニ於テ訴訟關係人ニ書類ヲ送達スルニ付キ別ニ
 規則アラサル時ハ書記其送達書類ヲ作り書記局所屬ノ使丁ヲシテ之
 ヲ送達セシム
 若シ書類ノ送達ヲ受ク可キ者裁判所ノ管轄地外ニ在ル時ハ其地ノ
 裁判所ノ書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

トナラサル場合其
 損害ノ賠償ヲ命
 職務ノ以テ爲シ
 要ルモ第十七條
 同法第七條ニモ
 準スルハ同條ニ
 被檢候得共同條
 警察官ト指定シ
 一般官ニ適用ス
 爲念一文ト難認
 指令月廿七日
 同令ノ趣治罪法
 十條ニ掲載シ
 クル官吏ト均シ
 ケサル儀ト心得
 明治十六年十
 月八日

第二十三條 送達書ハ二通ヲ作り其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡
 スコト得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ
 送達人ハ之ヲ受取りタル者ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム若シ署
 名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
 同居ノ親屬又ハ雇人ニ書類ヲ渡スコト得ス若シハ是等ノ者之ヲ受
 取ルコト肯セサル時ハ其地ノ戸長ニ渡置キ戸長ハ其書類ニ認印シ
 速ニ本人ニ送達スルノ處分ヲ爲ス可シ
 送達人ハ書類ヲ受取りタル者ノ氏名場所及ヒ日時ヲ其二通ニ記載
 ス可シ
 本條ノ規則ニ背キタル時ハ書類送達ノ効ナカル可シ
 送達人ハ其一通ヲ書記局ニ還納シ書記局ニ於テハ送達ノ證トシテ
 之ヲ保存ス可シ
 第二十四條 休暇ノ日及ヒ日出前日没後ハ書類ノ送達ヲ爲ス可カラ
 ス此規則ニ背キタル時ハ其送達ノ効ナカル可シ但本人承諾シテ其
 送達ヲ受ケタル時ハ此限ニ在ラス

第二十五條 官吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其書類ノ效ナカル可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ官吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十六條 官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十七條 此法律ニ於テ定メタル豫審又ハ公判ニ付テノ規則ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサル時ハ其效アリ

トス

第二十八條 此法律ハ將來頒布ス可キ別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス但其法律ニ牴觸スル規則ハ此限ニ在ラス

従前頒布シタル別段ノ法律ニ於テ豫審又ハ公判ノ手續ヲ定メタル犯罪ニ付テハ前項ノ例ニ在ラス

第二十九條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ例ニ從フ

第二編 刑事裁判所ノ構成及ヒ權限

第一章 通則

第三十一條 通常刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬ス

第三十二條 裁判所ノ位置及ヒ管轄ノ區劃ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上

裁ヲ以テ之ヲ定ム

第二十三條 裁判所ニハ檢察官一名又ハ數名ヲ置ク

第二十四條 刑事ニ付キ檢察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ヲ捜査ス

二 犯罪ニ付キ取調ノ處分及ヒ法律ノ適用ヲ裁判官ニ請求ス

三 裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ヲ指揮ス

四 裁判所ニ於テ公益ヲ保護ス

第二十五條 檢察官一名ハ公廷ニ立會フ可シ

第二十六條 裁判所ニハ書記一名又ハ數名ヲ置ク

第二十七條 書記ハ豫審及ヒ公判ニ立會ヒ調書公判始末書其他訴訟

ニ關スル一切ノ書類ヲ作ル可シ

又裁判言渡書其他一切ノ書類ヲ保存ス可シ

第二十八條 犯罪ノ種類ニ因リ裁判管轄ヲ定ムルヲ左ノ如シ

一 違警罪ハ違警罪裁判所

二 輕罪ハ輕罪裁判所

三重罪ハ重罪裁判所

重罪及ヒ輕罪又ハ輕罪及ヒ違警罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタル時ハ附帶ノ犯罪ニ非スト雖モ上等ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第二十九條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ數罪ヲ犯シタル時

二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ數罪ヲ犯シタル時

三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其罪ヲ免カル、爲メ

他ノ罪ヲ犯シタル時

第四十條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ

公判ノ管轄ナリトス

犯罪ノ地分明ナラサル時ハ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十一條 數箇ノ裁判所ノ管轄地内ニ於テ同時ニ又ハ繼續シテ一箇ノ罪ヲ犯シタル時ハ其中ニテ被告人逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其

管轄ナリトス

數罪俱發ノ場合ニ於テモ亦同シ

第四十二條 犯罪ノ地ニ非サル裁判所ノ管轄地内ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ最近ノ管轄裁判所ニ送致ス可シ

令狀ヲ以テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ其令狀ヲ發シタル裁判所ニ送致ス可シ

第四十三條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルニ能ハス若クハ法律上逮捕スルコトヲ許サル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第四十四條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス 數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アル時ハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

高等法院及ヒ陸海軍裁判所ノ管轄ニ付キ法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ本條ノ例ニ在ラス

第四十五條 外國ニ在テ犯シタル罪日本國ノ法律ニ依リ處斷ス可キ

者ニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル時ハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタル時ハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

闕席裁判ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最終住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス其住所分明ナラサル時ハ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ

第四十六條 商船内ノ犯罪ニ付テノ管轄及ヒ訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 豫審ヲ爲シタル裁判官ハ其公判ニ干預ス可カラズ前ニ豫審又ハ公判ヲ爲シタル裁判官ハ哀訴及ヒ闕席裁判ニ對スル故障ヲ除クノ外其上訴ノ裁判ニ干預ス可カラズ此規則ニ背キタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第四十八條 裁判所ハ訴ヲ受ケタル事件ニ付キ自ラ其管轄ナリヤ否ヲ判決スルノ權アリ其判決ニ付テハ本案ノ事件終審ナル可キ場合ト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ檢察官其他訴訟關係人ヨリ上訴スルコト

得

第二章 違警罪裁判所

第四十九條 治安裁判所ハ違警罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス

第五十條 違警罪裁判所判事ノ職務ハ治安裁判所判事之ヲ行フ判事差支アル時ハ判事補其職務ヲ行フ

第五十一條 違警罪裁判所檢察官ノ職務ハ其裁判所々在ノ地ノ警部之ヲ行フ

第五十二條 違警罪裁判所檢察官ハ毎月未決既決ノ事件表ヲ作り輕罪裁判所檢事ニ差出ス可シ

事件表ニハ違警罪裁判所判事認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第五十三條 違警罪裁判所書記ノ職務ハ治安裁判所書記之ヲ行フ

第三章 輕罪裁判所

第五十四條 始審裁判所ハ輕罪裁判所トシテ其管轄地内ニ於テ犯シ

タル輕罪ヲ裁判ス

又重罪及ヒ輕罪ノ豫審ヲ行フ

又其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス
第五十五條 輕罪裁判所判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス

又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルヲ得

第五十六條 豫審判事ノ職務ハ司法卿ヨリ始審裁判所判事一名又ハ數名ニ滿一年間之ヲ命ス

又滿一年以上其職務ヲ繼續ス可キヲ命スルヲ得

第五十七條 判事差支アル時ハ其他ノ判事又ハ判事補其職務ヲ行フ判事補ハ豫審又ハ公判ニ立會ヒ意見ヲ述ルヲ得

第五十八條 輕罪裁判所 察官ノ職務ハ始審裁判所檢事又ハ其指名シタル檢事補之ヲ行フ

第五十九條 輕罪裁判所書記ノ職務ハ始審裁判所書記之ヲ行フ

第六十條 東京警視本署長及ヒ府縣長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法

○ 司法省 樺戸集治監 伺
 已決囚徒入監ノ願
 所持ノ物品ヲ請願
 任セ司獄官吏ヨ
 他ノ發覺シタル物
 後ハ罪發シタル物
 品ハ發覺シタル物
 ニ供シタルモノナ
 ルハ其公商ノ買
 取ラサルモ之
 ナルヲ買取ルモ之

警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府長官ハ此限ニ在ラス
 左ニ記載シタル官吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ第三編ニ定メタル規則ニ從ヒ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ
 一 警視警部
 二 區長郡長
 三 治安判事
 四 警部ノ在ラサル地ノ戸長
 第六十一條 司法警察官檢察官又ハ裁判官ハ他ノ司法警察官檢察官又ハ裁判官ヨリ犯罪取調ノ爲メ其管轄地内ニ於テ證據其他事實參考ト爲ル可キ事物ヲ集取ス可キノ囑託ヲ受クルコトアル可シ
 第六十二條 檢事ハ二月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ
 又違警罪裁判所檢察官ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ檢事長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

收スルノ限ニ無之

候哉 第二條
 總テ證據物品裁判
 所ノ管轄地外ニ
 ル時ハ其管轄地
 所メ囑託シ送付
 求メ可然又送
 付費用然レノ裁
 然哉 第三條
 前條送附シタル物
 品裁判濟ノ上還
 ノ云渡ナシ受テ
 時其言渡ヲ受テ
 者裁判所ノ管轄
 外裁判所ハ其地
 轄送致所ニ囑託
 還然ラハ其送費
 ハ何レハ裁送費
 リ支辨ス可儀ニ
 候哉 同候條至急御

事件表ニハ裁判所長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第四章 控訴裁判所

第六十三條 控訴裁判所ニ刑事局ヲ置キ輕罪裁判所ノ始審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス但其裁判ハ判事三名以上ニテ之ヲ爲ス可シ
 第六十四條 刑事局判事ノ職務ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事數名ニ順次滿一年間之ヲ命ス
 又滿一年間更ニ其職務ヲ繼續セシムルコト得
 第六十五條 刑事局判事差支アル時ハ裁判所長ヨリ民事局判事ヲシテ其職務ヲ行ハシム
 裁判所長ハ何時コトモ裁判長ト爲ルコト得
 第六十六條 刑事局檢察官ノ職務ハ其裁判所檢事長又ハ其指名シタル檢事之ヲ行フ
 第六十七條 檢事長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ輕罪裁判所檢事ニ屬スル司法警察及ヒ起訴ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬ノ檢事ヲシテ之ヲ行ハシムルコト得

裁令相成度候也
明治十六年十月五日

第一條 見込ノ通
第二條 治罪ノ通
第三條 治罪ノ通
第四條 治罪ノ通
第五條 治罪ノ通
第六條 治罪ノ通
第七條 治罪ノ通
第八條 治罪ノ通
第九條 治罪ノ通
第十條 治罪ノ通
第十一條 治罪ノ通
第十二條 治罪ノ通
第十三條 治罪ノ通
第十四條 治罪ノ通
第十五條 治罪ノ通
第十六條 治罪ノ通
第十七條 治罪ノ通
第十八條 治罪ノ通
第十九條 治罪ノ通
第二十條 治罪ノ通
第二十一條 治罪ノ通
第二十二條 治罪ノ通
第二十三條 治罪ノ通
第二十四條 治罪ノ通
第二十五條 治罪ノ通
第二十六條 治罪ノ通
第二十七條 治罪ノ通
第二十八條 治罪ノ通
第二十九條 治罪ノ通
第三十條 治罪ノ通
第三十一條 治罪ノ通
第三十二條 治罪ノ通
第三十三條 治罪ノ通
第三十四條 治罪ノ通
第三十五條 治罪ノ通
第三十六條 治罪ノ通
第三十七條 治罪ノ通
第三十八條 治罪ノ通
第三十九條 治罪ノ通
第四十條 治罪ノ通
第四十一條 治罪ノ通
第四十二條 治罪ノ通
第四十三條 治罪ノ通
第四十四條 治罪ノ通
第四十五條 治罪ノ通
第四十六條 治罪ノ通
第四十七條 治罪ノ通
第四十八條 治罪ノ通
第四十九條 治罪ノ通
第五十條 治罪ノ通
第五十一條 治罪ノ通
第五十二條 治罪ノ通
第五十三條 治罪ノ通
第五十四條 治罪ノ通
第五十五條 治罪ノ通
第五十六條 治罪ノ通
第五十七條 治罪ノ通
第五十八條 治罪ノ通
第五十九條 治罪ノ通
第六十條 治罪ノ通
第六十一條 治罪ノ通
第六十二條 治罪ノ通
第六十三條 治罪ノ通
第六十四條 治罪ノ通
第六十五條 治罪ノ通
第六十六條 治罪ノ通
第六十七條 治罪ノ通
第六十八條 治罪ノ通
第六十九條 治罪ノ通
第七十條 治罪ノ通
第七十一條 治罪ノ通
第七十二條 治罪ノ通
第七十三條 治罪ノ通
第七十四條 治罪ノ通
第七十五條 治罪ノ通
第七十六條 治罪ノ通
第七十七條 治罪ノ通
第七十八條 治罪ノ通
第七十九條 治罪ノ通
第八十條 治罪ノ通
第八十一條 治罪ノ通
第八十二條 治罪ノ通
第八十三條 治罪ノ通
第八十四條 治罪ノ通
第八十五條 治罪ノ通
第八十六條 治罪ノ通
第八十七條 治罪ノ通
第八十八條 治罪ノ通
第八十九條 治罪ノ通
第九十條 治罪ノ通
第九十一條 治罪ノ通
第九十二條 治罪ノ通
第九十三條 治罪ノ通
第九十四條 治罪ノ通
第九十五條 治罪ノ通
第九十六條 治罪ノ通
第九十七條 治罪ノ通
第九十八條 治罪ノ通
第九十九條 治罪ノ通
第一百條 治罪ノ通

又起訴及ヒ其他ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察官ニ告達スルヲアル可シ

第六十八條 檢察長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

又輕罪裁判所檢察事ヨリ差出シタル事件表ヲ同時ニ司法卿ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第六十九條 刑事局書記ノ職務ハ其裁判所書記之ヲ行フ

第七十條 重罪裁判所ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第七十一條 重罪裁判所ハ三月毎ニ之ヲ開ク

第七十二條 重罪裁判所ハ控訴裁判所又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第七十三條 重罪裁判所ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名但控訴裁判所長ヨリ其裁判所判事ニテ之ヲ命ス

二 陪席判事四名但控訴裁判所ニ於テ開ク時ハ裁判所長ヨリ其裁判所判事中ニテ之ヲ命シ始審裁判所ニ於テ開ク時ハ其裁判所長及ヒ先任ノ判事ヲ以テ之ニ充ツ

第七十四條 重罪裁判所檢察官ノ職務ハ控訴裁判所檢察長又ハ其指名シタル檢察事之ヲ行フ

第七十五條 重罪裁判所書記ノ職務ハ開廳ス可キ裁判所ノ書記之ヲ行フ

第七十六條 控訴裁判所檢察長ハ閉廳ノ後既決事件表ヲ作リ司法卿ニ差出ス可シ

第七十七條 大審院ニ刑事局ヲ置キ左ノ條件ヲ裁判ス

一 上告

二 再審ノ訴

三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

第七十八條 刑事局ニ於テハ判事五名以上ニ非サレハ裁判ヲ爲ス可

カラス

第七十九條 刑事局判事ノ職務ハ司法卿ノ奏請ニ因リ其院判事ニ之

ヲ命ス

判事差支アル時ハ民事局判事授任ノ順序ニ從ヒ其職務ヲ行フ

第八十條 刑事局檢察官ノ職務ハ其院檢察長又ハ其指名シタル檢事
之ヲ行フ

第八十一條 刑事局書記ノ職務ハ其院書記之ヲ行フ

第八十二條 檢事長ハ三月毎ニ豫審及ヒ公判ノ未決既決ノ事件表ヲ
作リ司法卿ニ差出ス可シ

事件表ニハ院長認印シ且意見アル時ハ之ヲ附記ス可シ

第七章 高等法院

第八十三條 高等法院ニ於テハ刑法第二編第一章第二章ニ記載シタ
ル重罪ヲ裁判ス

又皇族ノ犯シタル重罪及ヒ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ヲ裁判ス

又勅任官ノ犯シタル重罪ヲ裁判ス

第二項ニ記載シタル者ノ正犯及ヒ從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハズ其院
ニ於テ之ヲ裁判ス

第八十四條 高等法院ハ司法卿ノ奏請ニ因リ上裁ヲ以テ之ヲ開ク其

裁判ス可キ事件及ヒ開院ス可キ場所モ亦上裁ヲ以テ之ヲ定ム

第八十五條 高等法院ハ左ノ職員ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

一 裁判長一名陪席裁判官六名但元老院議官大審院判事ニヨリ毎年
豫メ上裁ヲ以テ之ヲ命ス

二 豫備裁判官二名但前項ノ式ニ從ヒ之ヲ命ス

第八十六條 豫審判事ノ職務ハ上裁ヲ以テ大審院刑事局判事一名又

ハ數名ニ之ヲ命ス

第八十七條 高等法院檢察官ノ職務ハ大審院檢事長又ハ司法卿ヨリ指名シタル檢事之ヲ行フ

第八十八條 高等法院書記ノ職務ハ大審院書記之ヲ行フ

第八十九條 高等法院ノ裁判ニ對シテハ上訴ヲ許サス但左ノ條件ニ於テハ其院ニ上訴スルコトヲ得

一 闕席裁判アリタル場合ニ於テ故障

二 第四百三十六條ト同一ノ場合ニ於テ哀訴

三 第四百三十九條ト同一ノ場合ニ於テ再審ノ訴

第九十條 被告事件夥多ナル時又ハ再審ノ訴ヲ裁判ス可キ時ハ新ニ職員ヲ命スルコトアル可シ

第九十一條 高等法院ノ訴訟手續ハ通常ノ規則ニ從フ

第三編 犯罪ノ捜査起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第九十二條 檢察官ハ後ニ記載シタル告訴告發現行犯其他ノ原由ニ

因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時ハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査シ第七條以下ノ規則ニ從ヒ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 何人ニ限ラス重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若シハ被告人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

豫審判事告訴ヲ受ケタル時ハ第四百十四條以下ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

檢事告訴ヲ受ケタル時ハ第七條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ
司法警察官告訴ヲ受ケタル時ハ速ニ其書類ヲ檢事ニ送致ス可シ

違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得其告訴ヲ受ケタル司法警察官ハ之ヲ違警罪裁判所檢察官ニ移ス可シ

第九十四條 告訴人ニ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

又告訴人ハ第一百條以下ノ規則ニ從ヒ民事原告人ト爲ルヲ得
 第九十五條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可
 シ
 又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ
 作り告訴人コ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺
 印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
 告訴人ニハ告訴ヲ受ケタルノ證書ヲ渡ス可シ
 第九十六條 官吏其職務ヲ行フニ因テ重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ
 重罪輕罪アリト思料シタル時ハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發
 ス可シ
 告發ハ官吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及
 ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ
 違警罪ニ付テハ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ
 第九十七條 何人ニ限ラス重罪輕罪アルヲ認知シ又ハ重罪輕罪ア
 リト思料シタル時ハ第九十四條第九十五條ノ規則ニ從ヒ其所在ノ

地若シハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ告發スルヲ得
 告發ヲ受ケタル官吏ハ第九十三條ノ規則ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ
 第九十八條 告訴告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得但第九十六
 條ノ場合ハ此限ニ在ラス
 無能力者ノ告訴ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲スモ其效アリトス
 第九十九條 告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其中立ヲ變更スルヲ得
 此場合ト雖モ第十六條ノ規則ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受クル
 トアル可シ
 第二節 現行犯罪
 第百條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタ
 ル罪ヲ謂フ
 第百一條 重罪輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス
 一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラレ、時
 二 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帯シタル時

三家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可
キ者ヲ逮捕スル爲メ戶主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタル時

第二百二條 司法警察官及ヒ巡查其職務ヲ行フニ當リ重罪輕罪ノ現行
犯アルコトヲ知リタル時ハ令狀又ハ命令ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕
ス可シ

違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ之
ヲ違警罪裁判所檢察官ニ告發ス可シ其氏名住所分明ナラス又ハ逃
亡ノ恐アル者ハ違警罪裁判所ニ引致スルコトヲ得

第二百三條 巡查被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致
ス可シ
其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ
作ル可シ

第二百四條 司法警察官被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受取リタル時ハ假ニ
被告人ノ訊問及ヒ檢證處分ヲ爲ス可シ

第二百五條 何人ニ限ラス重罪輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ

被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第二百六條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察
官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業住所
及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查ニ引渡シタル時ハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可シ
被告人又ハ巡查ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求
ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ
拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第一節 檢察官ノ起訴

第二百七條 檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタル時ハ左ノ手續ヲ爲ス可シ
一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ
二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕罪難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又
ハ直チニ輕罪裁判所ニ其訴ヲ爲ス可シ
三 違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ

違警罪裁判所檢察官ニ送致ス可シ

四被告人ノ身分犯罪ノ種類又ハ場所ニ因リ其管轄ニ屬セサル者ト
思料シタル事件ニ付テハ之ヲ管轄裁判所檢察官ニ送致ス可シ
被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサル者ト思料シタル時
ハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第八條 前條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ル時ハ檢事ヨリ其處
分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第九條 檢事豫審ヲ求ムル時ハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物
ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ原被ノ證人ト爲ル
可キ者ヲ指示ス可シ

第二節 民事原告人ノ起訴

第十條 重罪輕罪ノ被害者公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲サントスル時
ハ告訴ト共ニ之ヲ中立テ又ハ告訴ヲ爲シタル後其旨ヲ豫審判事ニ
申立ツ可シ

豫審判事直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ受ケケ

ル時ハ檢察官ノ起訴ナント雖モ公訴私訴ヲ併セテ受理シタル者ト
ス

豫審判事ハ何レノ場合ニ於テモ直チニ被害者ヨリ民事原告人ト爲
ル可キノ申立ヲ受ケタル時ハ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第十一條 被害者ハ公訴ノ本案ニ付キ始審終審ノ裁判言渡アルマ
テ何時ニテモ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルヲ得
又私訴ノ願下ヲ爲シタル後更ニ申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變
更スルヲ得

第十二條 被害者ハ代人ニ委任シテ私訴ヲ爲シ又ハ其願下若クハ
棄權ヲ爲スヲ得

被害者無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人之ヲ爲ス可シ

第三章 豫審

第十三條 現行ノ重罪輕罪ヲ除クノ外豫審判事ハ前章ニ定メタル
規則ニ隨ヒ檢事又ハ民事原告人ノ請求アルニ非ザレハ豫審ニ取掛
ルヲ得ス此規則ニ背キタル時ハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效

ナカル可シ

第一百四條 豫審判事ハ重罪輕罪ニ付キ直チニ告訴又ハ告發ヲ受ケタル時ハ召喚狀ヲ以テ被告人ヲ呼出シ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ引續キ取調ヲ爲ス可キ者ト思料シタル時ハ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第一百五條 豫審判事ハ告訴告發ノ事件急速ヲ要スル時ハ直チニ被告人ニ對シ勾引狀ヲ發シ又ハ訊問シタル後勾留狀ヲ發スルコトヲ得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知シ且證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致ス可シ

若シ其通知ヲ爲シタルヨリ一日内ニ檢事起訴ヲ爲サ、ル時ハ速ニ被告人ヲ放免ス可シ但後日起訴ヲ爲スノ妨礙ト爲ルコトナカル可シ
第十六條 被告人所在ノ地ノ豫審判事直チニ告訴告發ヲ受ケ又ハ檢事ヨリ其送致ヲ受ケ被告人事件急速ヲ要スル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ被告人ノ訊問又ハ檢證處分ヲ爲シタル後證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ犯罪ノ地ノ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思量シタル時ハ勾留狀ヲ以テ被告人ヲ送致スルコトヲ得

第十七條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟書類ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ
又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第十八條 豫審判事ハ檢事又ハ民事原告人ノ起訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタル時ハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ
召喚狀ニ因リ出廷シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出廷ノ日ヲ過シタルコトヲ得ス

第十九條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住モサル時ハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第二十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セザ

○ 司法省 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
訊問 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
現行 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
訊問 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
訊問 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
訊問 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
訊問 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
訊問 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀
訊問 豫審判事 檢事 豫審判事 被告人 召喚狀

右照會書ニ依リ護
送ス可キ者ニ有テ
候哉將タ勾引狀ヲ
發シ引致セシメ有
問スヘキ儀ニ可
之哉 第二條
司法警察官ニ於テ
事實參考ノ爲メ既
決囚ノ陳述ヲ聞カ
護送方監獄署ハ該
會ス可キモ報知有
之候哉將タ報知シ
ヲ監獄署ヘ送致シ
監獄署ニ於テ其
報知書ヲ本人ニ下
付シタル上無論護
送ス可キモ無護
有之哉 內訓候也
右仰 內訓候也
內訓 一月廿六日
第一條 後段見

ル時ハ勾引狀ヲ發スルヲ得
第百二十一條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得
一 被告人定リタル住所アラサル時
二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スルノ恐アル時
三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスルノ恐アル時
第百二十二條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其命令ヲ發シタル豫審判事ニ被告人ヲ引致ス可シ
勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スル時ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ
第百二十三條 勾引狀ヲ發シタル前被告人既ニ豫審判事ノ管轄地外ニ在ル時ハ被告人ヨリ其所在ノ地ノ豫審判事ノ取調ヲ求ムルヲ得其求ヲ受ケタル豫審判事ハ假ニ被告人ヲ勾留シ速ニ勾引狀ヲ發

解ノ通 前段見
第二條
明治十六年十月五日

シタル豫審判事ニ其旨ヲ通知ス可シ
第百二十四條 前條ノ場合ニ於テ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ハ被告人ヲ勾留シタル豫審判事ニ訊問ノ條件ヲ明示シテ其處分ヲ囑託シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ被告人ヲ送致ス可キヲ請求ス可シ
其囑託ヲ受ケタル豫審判事ハ被告人ヲ訊問シタル後其旨ヲ勾引狀ヲ發シタル豫審判事ニ通知シ其意見ヲ聽キ被告人ヲ放免シ又ハ前ニ發シタル勾引狀ヲ以テ管轄豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
第百二十五條 豫審判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルヲ得若シ被告人其管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事ニ訊問ノ事ヲ囑託ス可シ
第百二十六條 勾留狀ハ被告人逃亡シ又ハ第百二十三條ノ場合ヲ除クノ外被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料ス

○ 司 岐 本 豫 本 年 檢 事 第 八 號 訓 罪 裁 判 所
 事 審 判 事 審 判 分 審 判 內 書 爲
 得 人 證 人 審 判 分 審 判 內 書 爲
 御 訊 問 布

ルニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス
 第二百二十七條 豫審判事ハ勾留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過クル時
 ハ之ヲ收監狀ニ換ヘ若クハ第二百十九條ノ規則ニ從ヒ被告人ヲ責
 付ス可シ
 檢事ハ被告人ヲ責付スルコトナク更ニ十日間之ヲ勾留ス可キヲ豫
 審判事ニ求ムルヲ得
 第二百二十八條 收監狀ハ既ニ取掛リタル豫審ノ手續ヲ檢事ニ通知シ
 且其意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ發スルヲ得ス
 第二百二十九條 收監狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ
 一 被告事件ノ概略及ヒ加重減輕ノ模様アル時ハ其概略
 二 其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條
 三 檢察官ノ意見ヲ聽キタルコト
 第二百三十條 總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名職業住所ヲ記
 載ス可シ但召喚狀ヲ除クノ外其氏名分明ナラサル時ハ容貌體格等
 チ明示ス可シ

告 有 之 二 付 書 記 取 調
 立 會 豫 審 事 件 終 結
 結 言 渡 書 署 名 捺 印 存 案
 無 論 書 記 署 名 存 案
 要 共 總 法 第 百 三 十 條
 得 治 罪 法 第 百 三 十 條
 記 第 二 項 第 百 三 十 條
 記 第 二 項 第 百 三 十 條
 請 訓 候 也 付 此 段
 內 訓 別 紙 請 訓 終 結 令
 狀 ハ 紙 勿 論 終 結 令
 言 渡 書 署 名 捺 印 存 案
 ノ 連 署 名 捺 印 存 案
 キ 者 ト 心 得 候 也
 此 段 及 內 訓 候 也
 明 治 十 六 年 十 月 四 日
 司 法 省

又令狀ニハ之ヲ發スルノ年月日時ヲ記載シ豫審判事及ヒ書記署名
 捺印ス可シ
 勾引狀勾留狀收監狀ハ巡查ヲシテ之ヲ執行セシム
 第三百三十一條 召喚狀ハ第二百三十三條ノ規則ニ從ヒ書記局所屬ノ使丁
 ナシテ被告人又ハ其住所ニ之ヲ送達セシム
 第三百三十二條 勾引狀勾留狀收監狀ハ日本全國ニ於テ之ヲ執行ス但
 時宜ニ因リ正本數通ヲ作り巡查數人ニ分付スルコトアル可シ
 前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其贖本ヲ下付ス可
 シ此場合ニ於テハ第二十三條第二項第四項ノ規則ニ從フ
 第三百三十三條 令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查ハ被告人其家宅若クハ
 他人ノ家宅ニ潜匿シタリト思料シタル時ハ其地ノ戸長又其差支ア
 ル時ハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ
 巡查ハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラヌ搜索調書ヲ作り立會
 人ト共ニ署名捺印ス可シ
 家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得

可キヤ將タ發ス可
 時治罪法第二三
 十條ノ規則ニ依
 リ被爲人ニ於テ
 障ヲ爲スルハ假
 令拘留留狀ル
 期止リ候モ然
 スルモ依テ然
 置クヘキモノ
 ヤ疑議ヲ生シ
 付至急何分ノ
 示相成度此段
 訓候也
 明治十六年十
 二月四日
 内訓
 別紙請訓ノ趣
 審判事ニ於テ
 監狀ヲ發セス
 責付テ爲サ
 時檢事又ハ豫
 リ檢事又ハ豫
 ノ判事ニ於テ
 旨事ニ於テ

第四百十一條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非
 スト思料シタル時ハ豫審中何時ニテモ勾留狀又ハ收監狀ヲ取消ス
 可シ但收監狀ヲ取消ス時ハ豫メ檢察官ノ意見ヲ聽ク可シ
 第四百十二條 監倉ニハ刑法治罪法ヲ備置キ被告人ノ請求ニ從ヒ之
 ヲ貸與ス可シ

第二節 密室監禁

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シ
 タル時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀若シハ收監狀ヲ
 受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲スヲ得
 第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別
 室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類
 貨幣其他ノ物品ヲ授受スルヲ許サス
 食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名
 シタル者チシテ之ヲ給與セシム
 第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡

也シ此旨及内訓候

明治十六年十
 二月廿日

ヲ更改スルヲ得

言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問シ通常ノ規則ニ從
 ヒ調書ヲ作ル可シ

第三節 證據

第四百十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様ニ因リ有罪ナルノ推測
 ヲ定ムルヲナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調 證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其
 他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權
 ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊
 問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト
 共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人

二名アルヲ要ス但監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百四十九條 豫審判事先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第四百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラス

第四百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
書記ハ本條ノ式ヲ履行シタルヲ記載シ豫審判事ト共ニ署名捺印

ス可シ

第四百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第四百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヲ得

第四百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルヲ人違ナキヲ其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

第四百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第四百五十一條 第四百五十二條ノ規則ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第四百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ書面ヲ以テ問ヒ聾ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者聾者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ

第二百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第二百九十二條 第二百九十三條 第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證及ヒ物件差押

第一百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

第一百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

第一百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ人違ナキヲ又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シト惡料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ書記之ヲ擔任ス可シ

第一百六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

第一百六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ立會アルヲ要ス

第一百三十三條 第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第一百六十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分ニ立會フヲ得但豫審判事其立會ノ爲メ豫審ヲ遅延ス可カラズ

第一百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判事ハ第一百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押フ可シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人ニ渡ス可シ

第六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハズ其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽シテ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ
第六十七條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得
若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得

第六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得

第六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係ア

ル者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ
前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又ハ會社ニ還付ス可シ

第六節 證人訊問

第七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ順序ニ從ヒ又ハ最も事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限り先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス

又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スヲ得

第七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕罪裁判所書記ニ送達

ノ事ヲ囑託ス可シ

第七十二條 豫審判事ハ證人裁判所々在ノ地ニ住ミサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達ス可シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第七十五條 證人ト爲ス可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可

キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除クノ外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコアル可シ

第七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコト其呼出狀第七十三條ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出廷スル能ハカリシコトヲ證明シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス可シ

第七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ

差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキコトヲ證明ス可シ
第七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年
齡職業住所及ヒ第八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ
第八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ
爲ス可キコトヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名
捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
宣誓書ハ訴訟書類ニ添置シ可シ

第八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但事實參
考ノ爲メ其陳述ヲ聽クコトヲ得

- 一 民事原告人
- 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
- 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見ヲ受クル者
- 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

第八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

一 十六歳未満ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者

三 瘡啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ重禁錮ノ刑

ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證據充分ナラザ
ルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第八十三條 證人宣誓ヲ肯セヌ又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ
豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可
シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス
醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身
分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ
在ラス

第八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ

但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得

第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得若シ證人同行スルヲ肯セサル時ハ第百七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

第百八十六條 第百五十六條第百五十七條ノ規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

第百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ其調書ニハ證人宣誓ヲ爲シタルヲ又ハ爲ササルノ事由ヲ記載ス可シ

第百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減セシムルヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルヲ及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第百九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高ニ等シキ償金ヲ要ムルヲ得

本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナリトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ

鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ
但勾引狀ヲ發スルヲ得ス

第七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓
ハ第八十條ノ式ニ從フ

書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルヲ鑑定命令書ノ紙尾ニ記載シ之ニ宣
誓書ヲ添置シ可シ

第九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサル時
ハ豫審判事掄事ノ意見ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡
ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第九十五條 第八十一條第八十二條ニ記載シタル者ニハ鑑定
ヲ命スルヲ得ス但急遽ノ際正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ナキ時ハ
事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命スルヲ得

第九十六條 豫審判事ハ成ル可シ鑑定ニ立會フ可シ

第九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定

人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルヲ得

第九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ爲シタ
ル時尙テ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一
箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記載シ署名捺印及ヒ契印
ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日ヲ記載シ書記ト共ニ
檢印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置シ可シ

外國人鑑定ヲ爲シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所ヨリ命シタル通事ノ
作リタル譯本ヲ添置シ可シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他相當ノ費用ヲ給與ス可
シ

第八節 現行犯ノ豫審

第二百一一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ得

第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待ツヲナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スヲ得但罰金ノ言渡ヲ爲スヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲナク之ヲ聽ク可シ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得但令狀ヲ發スルヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送致ス可シ

若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ直チニ被告人ヲ放免ス可シ

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ

更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之ヲ訴訟書類ニ添置シ得

第二百九條 檢事ハ輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

第九節 保釋

第二百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀又ハ收監狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出廷ス可キノ證書ヲ差出サシメ保釋ヲ許スヲ得

被告人無能力ナル時ハ親屬又ハ代人ヨリ保釋ヲ求ムルヲ得

第二百十一條 前條ノ證書ハ書記局ニ差出ス可シ

保釋中被告人ヲ呼出ス時ハ出廷ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲ス可シ

第二百十二條 保釋ヲ許スニハ金圓ヲ以テ被告人ノ出廷ヲ保證セシム可シ但豫審判事其金額ヲ定メ保釋ヲ許スノ言渡書ニ記載ス可シ

第二百十三條 保證ヲ爲スニハ被告人又ハ其他ノ者ヨリ保證金若クハ貯金預所又ハ銀行ノ預證書ヲ書記局ニ差出ス可シ
又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且充分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スヲ得

第二百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ保證金ノ全部又ハ幾分ヲ没入ス可シ

第二百十五條 保證金ヲ没入スルニハ檢事ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

若シ他人ノ保證ニ係ル時ハ民事ノ規則ニ從ヒ之ヲ徵收ス可シ

第二百十六條 豫審判事保證金ヲ没入シタル時ハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スヲ必要ナリトスル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第二百十七條 豫審判事保證金ヲ没入シタル後免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移

スノ言渡ヲ爲シタル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ前ニ没入シタル金額ヲ還付ス可シ

第二百十八條 豫審判事免訴ノ言渡違警罪裁判所ニ移スノ言渡又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタル時ハ保證金ヲ還付ス可シ

第二百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢事ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルヲ得

第十節 豫審終結

第二百二十條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルヲナシト思料シタル時ハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ一切ノ訴訟書類ヲ送致ス可シ

第二百二十一條 檢事ハ豫審充分ナラスト思料シタル時ハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサル時ハ檢事訴訟書類ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

○司法省前橋始審裁判所
脅迫者ノ告罪ヲ待テ被
害者ノ告罪ヲ待テ被
論スル檢事ノ請求
シタル事ハ假令
豫審中モ被害者ノ
權アルモ豫審則ニ
ハ通常ノ規則ニ從
ハ通ルモ規則ニ從
乃ホ終結ノ處分
チ爲スヘキ筋ト相
心得候モ其意見反
對ノ向モ有之候ニ
此豫審判事ニ於
但豫審判事ニ於
未豫審ニ着手
ノセテ豫審ニ着手

第二百二十二條 豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後ニ記載シタル言渡ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第二百二十三條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルヲ認メタル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スル者ト認メタル時ハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十四條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告入勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

一 犯罪ノ證據充分ナラサル時

二 被告事件罪ト爲ラサル時

三公訴ノ期滿免除ト爲リタル時

四 確定裁判ヲ經タル時

五 大赦アリタル時

六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スル時

本條ノ場合ニ於テ被害者ハ民事裁判所ニ非サレハ要償ノ訴ヲ爲スヲ得ス

ト雖係檢事ノ請
 求ニ同様分ハ
 本文儀ト相心得
 可然哉添テ相伺
 候也 明治十六年九
 月十三日
 指 命 檢 察 官 ノ 起 訴 害
 者 爲 シ 權 限 審 判 事
 者 棄 權 豫 審 判 事
 爲 時 於 本 案 直 爲
 調 査 要 言 渡 爲
 免 訴 ノ 者 ト 渡 爲
 明 治 十 六 年 九
 月 廿 九 日

第二百二十五條 被告事件違警罪ナリト思料シタル時ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十六條 被告事件輕罪ナリト思料シタル時ハ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲ス可シ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサル時ハ令狀ヲ發スルヲ得

第二百二十七條 被告事件重罪ナリト思料シタル時ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニハ控訴裁判所檢事長ノ指揮アルマテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ監倉ニ被告人ヲ留置ス可キヲ記載ス可シ

○司法省 大坂府 公事 凡 檢 察 官 起 訴 害 者 爲 時 於 本 案 直 爲 調 査 要 言 渡 爲 免 訴 ノ 者 ト 渡 爲 明 治 十 六 年 九 月 廿 九 日

凡 檢 察 官 起 訴 害 者 爲 時 於 本 案 直 爲 調 査 要 言 渡 爲 免 訴 ノ 者 ト 渡 爲 明 治 十 六 年 九 月 廿 九 日

第二百二十八條 豫審終結ノ言渡ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ勾留ス可キ時ハ其理由ヲ明示ス可シ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサルヲ公訴受理ス可カラサルヲ及ヒ其理由又犯罪ノ證據充分ナラサル時ハ其旨ヲ明示ス可シ

違警罪裁判所輕罪裁判所又ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質模樣證據ノ充分ナルヲ及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第二百二十九條 前條ノ言渡書ニハ第三百三十條ノ規則ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第二百三十條 書記ハ速ニ豫審終結ノ言渡書ノ謄本ヲ檢事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ但是等ノ者ハ第二百四十六條以下ノ規

不幸ノ害ニ陷ラキ
 者タルハ言テ可
 ス然ルニ當テ
 ノ各裁判所ニ於テ
 間ニハ豫審ノ事
 書中ニ憑テ
 明分トシテ
 充者有之ニ
 ノリ憑テ
 ナリトシテ
 ヤ漢然トシテ
 信ノ證ニ由テ
 ス檢察官ニ於テ
 罪ヲ證明スル
 料ヲ擇明スル
 自被反證ヲ照
 ス人ノ便チキ
 告人ノ不幸ヲ
 タス而シテ
 衆トシテ
 シテ

則ニ從ヒ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得

第二百三十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テ重罪裁判
 所又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付キ輕罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ
 爲シタル時ハ其旨ヲ言渡書ニ記載ス可シ但被告人ハ現ニ勾留ヲ受
 クルコト非サレハ其言渡ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ス

第二百三十二條 前條ノ場合ニ於テ檢事又ハ民事原告人ハ假ニ被告
 人ノ財產ヲ差押フ可キヲ民事裁判所ニ請求スルヲ得

第二百三十三條 豫審終結ノ言渡ヲ爲シタル時ハ豫審判事ヨリ速ニ
 其旨ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

又十五日毎ニ未決ノ豫審事件ニ付キ簡略ナル報告書ヲ差出ス可シ

第四章 豫審上訴

第二百三十四條 左ノ場合ニ於テハ檢事又ハ被告人ヨリ豫審終結ニ
 至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得

一 管轄違ノ申立ヲ棄却シタル時

二 法律ニ背キ令狀ヲ發シ又ハ之ヲ發セサル時

合テ生スルヲ覺
 抑モ治罪ノ第
 二條ノ末項ニ
 警罪ノ輕罪ニ
 判罪ノ重罪ニ
 所移ハ罪ノ性
 爲スモハ犯ノ
 質摸樣ニ憑テ
 十條ノ法ニ正
 罰スル可キ法
 有之夫レ本條
 神ナルヤ證憑
 分テモ緊要點
 ル所謂テ憑テ
 テシテ明シト
 ノ決ミテ示ス
 ノ非ラシテ充
 證憑ノ事項ヲ
 證憑ノ事項ヲ
 謂テ外列示ス
 中ニ於テ過半
 本

三 法律ニ背キ保釋責付ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サル時

四 越權ノ處分アル時

民事原告人ハ私訴ニ付キ第四ノ場合ニ於テ故障ヲ爲スヲ得

第二百三十五條 故障ヲ爲サントスル者ハ其裁判所ノ書記局ニ趣意
 書ヲ差出ス可シ

故障アリタル時ハ書記其趣意書ノ謄本ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ
 三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

故障ニ付テハ豫審處分ノ執行ヲ停止セス但保釋責付ヲ爲シタルコ
 付キ檢事ヨリ故障アリタル時ハ其執行ヲ停止ス

第二百三十六條 故障ハ其裁判所ノ會議局ニ於テ判事三名以上ニテ
 趣意書答辯書其他訴訟書類及ヒ檢事ノ意見書ニ依リ之ヲ判決ス可
 會議局ノ言渡ハ速ニ之ヲ執行ス但其言渡ニ對シテハ豫審終結ノ言
 渡アリタル後上告ヲ爲スヲ得

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ

第二百三十七條 左ノ場合ニ於テハ檢事被告人又ハ民事原告人ヨリ

議同感ノ者有之
 雖二前ノ顯判如キ
 在テ略記ノ簡便ニテ
 憑反テ有之レ主張ス
 ヒ法ナリ是レ必ス
 適モ有見解ヲ重簡
 ル律ノ手續ノ鄭重
 易且兩主義互ニ相
 背馳スルヨリ當職
 由セテ固ヨリ本廳
 於テ論無一ト雖
 異論裁判所ニ在
 他ハ各論無一ト雖
 テハ亦豫審判事有
 抑モ豫審判事有
 判決信於審判事有
 取捨信於審判事有
 レ有ハ格別同
 モレ決ハ格別同
 其心證ノ資料即
 豫審判事ノ要ヲ示
 憑事ノ必要ヲ示
 ト事ノ必要ヲ示
 ル憑事ノ必要ヲ示

豫審終結ニ至ルマテ豫審判事ヲ忌避スルコト得
 一 豫審判事又ハ其配偶者ト被告人被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト
 親屬ナル時
 二 豫審判事被告人又ハ民事原告人ノ後見人ナル時
 三 豫審判事又ハ其配偶者ニ於テ民事原告人被告人又ハ是等ノ者ノ
 親屬ヨリ賄賂ニ非スト雖モ贈物ヲ收受シ若クハ聽許シタル時
 第二百三十八條 忌避ノ申立ハ豫審判事ニ之ヲ爲ス可シ但其申立ヲ
 爲スニハ趣意書ニ通テ書記局ニ差出ス可シ
 書記ハ趣意書ヲ豫審判事ニ送致シ豫審判事ハ其送致ヲ受ケタルヨ
 リ二十四時内ニ其申立ヲ認可シ又ハ棄却スルコト趣意書ノ紙尾ニ
 記載シ一通ヲ書記局ニ藏置シ一通ヲ本人ニ送達ス可シ
 第二百三十九條 豫審判事忌避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ其申立人ヨ
 リ故障ヲ爲スコト得
 會議局ニ於テハ故障ノ趣意書及ヒ豫審判事ノ辯明書ニ依リ判決ヲ
 爲ス可シ

異同有之一定ノ制
 規無之ハ頗ル不
 合ト謂ハサルモ
 ス等ノ或ハ有ル
 是律上ノ敢テ各
 法トシテ豫審判
 シトシテ豫審判
 意見ノ放豫審判
 ハ自恐荒疎如傾
 分自恐荒疎如傾
 泛濫然流疎如傾
 ル弊害ヲ生セ如傾
 難測就テハ假令
 律上明文アルモ
 通治罪法第二百
 十入罪末項ニ精
 十入罪末項ニ精
 憑ノ事項ニ明シ
 憑ノ事項ニ明シ
 最モ以テ元則ト
 是認セサル本利
 就テハ前陳ノ如
 議論兩岐ニ涉リ

第二百四十條 豫審判事ハ忌避ノ申立アリタル時又ハ其中立ヲ棄却
 シタルコト付キ故障アリタル時ト雖モ豫審判手續ヲ繼續ス可シ但終
 結ノ言渡ヲ爲スコト得ス
 又急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審判手續ヲ停止スルコト得
 第二百四十一條 會議局ニ於テ忌避ニ付テノ故障ヲ棄却シタル時ハ
 上告ヲ爲スコト得但豫審終結ノ言渡アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲
 スコト得ス
 第二百四十二條 豫審判事自ラ第二百三十七條ニ定メタル理由アル
 コトヲ認め又ハ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ會議局ニ回避ノ申立
 ヲ爲スコシ
 回避ノ申立ハ會議局ニ於テ之ヲ判決ス可シ
 第二百四十三條 會議局ニ於テ忌避又ハ回避ノ申立ヲ認可シタル時
 ハ裁判所長更ニ他ノ判事ヲシテ豫審判ヲ爲サシム可シ其判事ハ檢事
 其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ前豫審判事ノ爲シタ
 ル處分ト雖モ更ニ取調ヲ爲スコト得

結一付定致サ、ル義
 成候御内訓ヲ仰キ
 下條分御稟請候
 也成此段稟請候
 内訓 二月十日
 請訓ノ趣豫審ノ
 言渡書トハ自然
 其趣ヲ異ニスル
 者二百八條末
 項二百八條末
 渡書ハ犯罪ノ性
 質摸樣ノ如キハ
 成載ル可ク明憑
 記載ト雖モ要ス
 可シトハ一々明憑
 示至ルニ及ハス
 其證憑ノ充分ナル
 ヲ以テ足レトス

第二百四十四條 書記ハ自ラ回避シ又ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ會
 議局ニ申立テ之ヲ忌避スルヲ得
 第二百四十五條 檢察官ハ被告人又ハ民事原告人ヨリ之ヲ忌避スル
 ヲ得ス若シ自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ會議局ニ
 申立ツルヲ得
 檢事補自ラ回避ス可キ者ト思料シタル時ハ其旨ヲ檢事ニ申立ツ可
 シ檢事ハ其申立テ許否ス可シ
 第二百四十六條 檢事ハ總テ豫審終結ノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得
 得
 民事原告人ハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルニ因リ豫審終結ノ言渡ニ
 對シ故障ヲ爲スヲ得
 被告人ハ重罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シ故障ヲ爲スヲ得輕罪裁
 判所又ハ違警罪裁判所ニ移スノ言渡ニ對シテハ豫審判事ノ管轄違
 越權又ハ其事件ヲ移ス可キ裁判所ノ管轄違ニ非サレハ故障ヲ爲ス
 ヲ得ス

也ス此旨及内訓候
 明治十六年十月
 八月十日
 司橋省審裁所
 前橋省審裁所
 檢事所ニ於テ重
 罪裁判所ニ於テ
 甲裁所ニ於テ重
 罪裁判所ニ於テ
 欠席告人ヲ公判
 ル地ニ於テ又重
 乙犯ニ於テ又重
 リタル際ニ於テ
 言渡書ニ對シテ
 タル乙裁對スル
 判所ニ於テ論議
 決所ニ於テ之ヲ
 ナルハ勿カモ判
 ヲ差出スヘキ手
 辨書等ノ期限ハ
 裁所ヨリ故障ノ
 關スル一件書類
 ○

第二百四十七條 故障ノ期限ハ一日ナリトス但言渡書ノ送達アリタ
 ルヨリ之ヲ起算ス
 第二百四十八條 檢事民事原告人及ヒ被告人故障ヲ爲スニハ申立書
 ナ書記局ニ差出ス可シ書記ハ速ニ其旨ヲ對手人ニ通知ス可シ
 故障申立人ハ三日内ニ趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ
 書記ハ速ニ趣意書ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差
 出スヲ得
 第二百四十九條 故障アリタル時ハ對手人ヨリ其判決アルマテ何時
 ニテモ附帶ノ故障ヲ爲スヲ得
 附帶ノ故障アリタル時ハ書記ヨリ其趣意書ヲ對手人ニ送達ス可シ
 對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得
 第二百五十條 豫審終結ノ言渡ハ故障ノ期限内又故障アリタル時ハ
 其判決アルマテ執行ヲ停止ス但被告人ヲ勾留シ又ハ保釋責付ヲ取
 消スノ言渡ハ其執行ヲ停止セス
 第二百五十一條 書記ハ故障趣意書答辯書其他訴訟書類ヲ會議局ニ

差出ス可シ

送致アリタルヨリ
起算スル儀ト相心
得可然哉此段相伺
候也
明治十六年十月五日

指令

別紙ノ旨ヲ言渡シ若シ其全部又ハ幾
分ヲ取消シタル時ハ全部ニ付キ更ニ言渡シ爲ス可シ
又被告ハ保釋責付シ又ハ勾留スルノ言渡シ爲ス可シ得
第二百五十三條 會議局ニ於テ必要ナリトスル時ハ判事一名ヲシテ
更ニ豫審ヲ爲シ又ハ其指示スル所ノ條件ニ付キ更ニ取調ヲ爲シ其
報告書ヲ差出サシム可シ
第二百五十四條 會議局ニ於テ故障ノ取調中管轄越權又ハ公訴受
理ス可カラサルコトヲ發見シタル時ハ職權ヲ以テ豫審判事ノ言渡シ
取消ス可シ得
第二百五十五條 會議局ニ於テ故障ノ取調中共犯ノ起訴ヲ受ケサル
者アルコト附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ受ケサル者アルコトヲ發見シタル
時ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ

其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス
可シ
第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢
事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ
第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ
爲ス可シ得
第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴
スルヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從
ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナル可シ
第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審
ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡
書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ
犯罪ト共ニ之
ヲ判決スルコ
ト得ルハ見込
得ルハ見込テ
此等判決所ニ
甲該書類ヲ送
シル該書類ヲ
アヨリ其書類
ニ被テ意致ス
セシ趣意致ス
キ者ト心得ヘ
二月廿六日

其報告書ヲ差出サシム可シ

檢事ハ意見書ヲ差出ス可シ
會議局ニ於テハ報告書其他訴訟書類ニ依リ故障ト共ニ之ヲ判決ス
可シ
第二百五十六條 故障ノ判決アリタル時ハ速ニ其言渡書ノ謄本ヲ檢
事民事原告人及ヒ被告人ニ送達ス可シ
第二百五十七條 檢事其他訴訟關係人ハ會議局ノ言渡ニ對シ上告ヲ
爲ス可シ得
第二百五十八條 被告人ニ送達ス可キ言渡書ニハ其言渡ニ對シ上訴
スルヲ得可キコト及ヒ其期限ヲ記載ス可シ其記載ナキ時ハ規則ニ從
ヒ更ニ言渡書ノ送達アルマテ被告人上訴ノ權ヲ失フコトナル可シ
第二百五十九條 第三百十一條ヨリ第三百十三條マテノ規則ハ豫審
ノ上訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス
第二百六十條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事其言渡
書ニ一切ノ書類ヲ添ヘ速ニ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致ス可シ

檢事長ハ一切ノ書類證據物件及ヒ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スノ處分ヲ檢事ニ命ス可シ

重罪裁判所以外ノ裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ檢事速ニ其執行ヲ爲ス可シ

第二百六十二條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其言渡確定シタル時ハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ更ニ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アル時ハ此限ニ在ラス

新ナル證據アル時ハ檢事ヨリ之ヲ會議局ニ差出シ會議局ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第二百六十二條 訴訟事件ハ書記局ノ簿冊ニ登記シタル順序ニ從ヒ之ヲ公判ニ付ス可シ

裁判所長ハ未決勾留ノ日數ヲ減縮スル爲メ職權ヲ以テ其順序ヲ變更スルコトヲ得

又重要ナル事由ノ爲メ檢察官其他訴訟關係人ノ請求アリタル時モ亦順序ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十三條 重罪輕罪違警罪ノ訊問辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス否ヲサレタル時ハ其言渡ノ效ナカル可シ

第二百六十四條 被告事件公安ヲ害シ又ハ猥褻ニ涉リ風俗ヲ害スルノ恐アル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訊問及ヒ辯論ノ傍聽ヲ禁スルコトヲ得其裁判言渡ヲ爲スニ當テハ傍聽ヲ許ス可シ

第二百六十五條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人疾病アルコト非スシテ出廷ヲ肯セサル時ハ之ヲ引致スルコトヲ得若シ出廷シテ辯論スルコトヲ肯セサル時ハ對審トシテ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十六條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得辯護人ハ裁判所々屬ノ代人中ヨリ之ヲ選任ス可シ但裁判所ノ允

許テ得タル時ハ代言人ニ非サル者ト雖モ辯護人ト爲スヲ得
第二百六十七條 被告人公廷ニ於テ暴行又ハ喧噪ヲ爲シ辯論ヲ妨礙
スル時ハ裁判長ヨリ再度吾戒ヲ爲シ仍ホ之ニ從ハサル時ハ檢察官
ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ被告人ヲ退廷セシメ若クハ勾留スル
ヲ得

前項ノ場合ニ於テハ對審トシテ引續キ辯論及ヒ裁判言渡ヲ爲ス
ヲ得

若シ辯論二日ニ渉ル時ハ更ニ被告人ヲ出廷セシム可シ

第二百六十八條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出廷スルヲ能ハサ
ル時ハ痊癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタル時ハ其痊癒ノ後新ニ辯
論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ル時ハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ
以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢察官其他訴訟
關係人ノ請求アリタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタル時ハ其痊

癒ノ後更ニ取調ヲ爲スヲナシ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第二百六十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人公判ノ日時ニ出廷
セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達シタルノ證
アルニ非サレハ闕席裁判ヲ爲ス可カラズ

豫審終結ノ言渡書又ハ呼出狀ヲ本人ニ送達スルヲ能ハサル場合ニ
於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期限ヲ定メ其期限内ニ被告人出廷セサル
時ハ闕席裁判ヲ爲ス可キノ告知書ヲ親屬若クハ戶長ニ送達ス可シ
第二百七十條 闕席シタル被告人ニ付テハ辯護人ヲ用フルヲ許サ
ス但其親屬故舊ハ被告人ノ出廷スルヲ能ハサルノ事由ヲ證明スル
ヲ得

裁判所ニ於テ其事由ヲ正當ナリトスル時ハ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁
判ヲ延期スルヲ得

第二百七十一條 被告人中ノ一名又ハ數名出廷セスト雖モ出廷シタ
ル者ニ付テハ通常ノ規則ニ從ヒ對審裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 裁判長ハ公廷ニ於テ諸般ノ取締ノ爲メ相當ノ處置

ヲ爲ス可シ

稱讚誹謗其他辯論ヲ妨礙スル者アル時ハ之ヲ制止シ又ハ退廷セシムルコトヲ得

第二百七十三條 公廷ニ於テ輕罪違警罪ヲ犯シタル者アル時ハ其身分ノ如何ニ拘ハラズ裁判長ノ命令ニ因リ之ヲ取押ヘ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ裁判ヲ爲シ又ハ次ノ公判ニ付スルノ言渡ヲ爲ス可シ書記ハ犯罪ノ事件及ヒ裁判長ノ處分ニ付キ即時ニ調書ヲ作ル可シ

第二百七十四條 前條ノ場合ニ於テ違警罪裁判所ニテハ違警罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲シ輕罪ニ付キ始審ノ裁判ヲ爲ス可シ

輕罪裁判所其他上等ノ裁判所ニテハ輕罪ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス可シ

第二百七十五條 公廷ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ裁判長被告人及ヒ證人ヲ訊問シ調書ヲ作り裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ通常ノ規則ニ從ヒ裁判スル爲メ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百七十六條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ事件及ヒ公廷内ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ事件ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル時ハ本案ノ裁判ヲ停止スルコトヲ得

第二百七十七條 檢察官被告人及ヒ民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハズ本案ノ裁判言渡アルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラザルノ申立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

第二百七十八條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ棄却シタル時ハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百七十九條 檢察官其他訴訟關係人ハ第二百三十七條ニ定メタル原由アル時ハ違警罪裁判所輕罪裁判所控訴裁判所又ハ重罪裁判

所ノ裁判官及ヒ書記ニ對シ忌避ノ申立ヲ爲スヲ得

豫審ヲ爲シタル裁判官其公判ニ干預シ又ハ始審裁判ヲ爲シタル裁判官其終審裁判ニ干預シタル時亦同シ

第二百八十條 忌避ノ申立ハ本案ノ裁判官言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ申立アリタル時ハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第二百八十一條 忌避又ハ回避ノ申立及ヒ其判決ヲ爲スニハ第二百

三十八條ヨリ第二百四十五條マテニ定メタル規則ニ從フ

第二百八十二條 忌避又ハ回避ノ申立ヲ棄却シタル時ハ前ニ停止シ

タルヨリ以後ノ手續ニ取掛ル可シ但五日間辯論ヲ停止シタル時ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

變災厄難ノ爲メ訴訟手續ヲ停止シタル時亦同シ

第二百八十三條 公判ニ於テ用フ可キ證據ハ豫審ニ於テ用フ可キ證據ニ同シ

第二百八十四條 裁判長ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ

職權ヲ以テ豫審中管轄官吏ノ作リタル調書及ヒ檢證書類ヲ朗讀セシムルヲ得

是等ノ書類ハ原被證人ノ陳述ト同一ノ效ヲ有ス

第二百八十五條 調書ヲ作リタル司法警察官ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ之ヲ呼出シ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ呼出スヲ得

豫審判事ハ裁判所ノ職權ニ因リ又ハ檢察官其他訴訟關係人ヨリ其裁判所ノ允許ヲ得テ調書証明ノ爲メ之ヲ呼出スヲ得

第二百八十六條 豫審ニ於テ訊問シタル證人ハ更ニ之ヲ呼出スヲ得

豫審ニ於テ錄取シタル證人ノ陳述書ハ更ニ其證人ヲ呼出サ、ル時證人呼出チ受ケ出廷セサル時又ハ豫審及ヒ公判ニ於テノ陳述ヲ比較ス可キ時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルヲ得

第二百八十七條 第七十八條以下ノ規則ハ公判ノ證人ニモ亦之ヲ

適用ス

第二百八十八條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又陳述前辯論ニ立會フ可カラス

第二百八十九條 證人ハ左ノ順序ニ從ヒ訊問ス可シ

一 檢察官ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

二 民事原告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

三 被告人及ヒ民事擔當人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人

第二百九十條 證人數名アル時ハ氏名目錄ノ順序ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ但裁判長ハ證人ヲ呼出シタル者ノ意見ヲ聽キ其順序ヲ變更スルヲ得

第二百九十一條 證人及ヒ被告人ハ裁判長ニ非サレハ之ヲ訊問スルヲ得

陪席判事及ヒ檢察官ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル條件ヲ分明ナラシムル爲メ證

人ヲ訊問ス可キヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第二百九十二條 證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ以テ豫審判事ニ送致ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

其證人ノ陳述ハ書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ事件ニ付キ裁判ノ延期ヲ言渡スヲ得

第二百九十三條 證人呼出ニ應セサル時ハ裁判所ニ於テ即時ニ檢察官ノ意見ヲ聽キ左ノ科料罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス

一 違警罪事件ニ付テハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ二圓以上十圓以下ノ罰金

被告人闕席シタル時ハ其呼出シタル證人出廷セスト雖モ科料罰金ヲ言渡ス可カラス

○新司法省
 治罪法第一條
 六條前略
 意見ヲ聽キ前金ノ定
 二倍タル科罰金ノ前
 之字ハ同法第九十
 三條ノ各項ヲ指シ
 タルモノナルヤ或

第二百九十四條 前條ノ言渡書ハ即時ニ書記ヨリ本人ニ送達ス可シ
 其言渡ヲ受ケタル者三日内ニ出廷スルヲ能ハサリ正當ノ事由ヲ
 證明シタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ科料又ハ罰金ノ
 言渡ヲ取消ス可シ但重罪裁判所閉廳ノ後ハ其閉廳シタル裁判所ニ
 其中立ヲ爲ス可シ

第二百九十五條 證人呼出ニ應セサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ノ
 請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公判ヲ延期スルノ言渡ヲ爲ス
 ヲ得
 檢察官自ラ其請求ヲ爲サル時ハ公判ノ延期ニ付キ意見ヲ陳述ス
 可シ

第二百九十六條 證人再度ノ呼出ヲ受ケ仍不出廷セサル時ハ檢察官
 ノ意見ヲ聽キ前ニ定メタル科料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用
 ナ言渡ス可シ此場合ニ於テモ亦前條ニ從ヒ再ヒ公判ヲ延期スルヲ
 得但延期シタル時ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發ス可シ
 第二百九十七條 第九十一條以下ノ規則ハ公判ニ於テ新ニ命シタ

ハ初度呼出シ右各項
 ノ範圍内ヲ以テ言
 シタル儀ナラヤ
 治罪法第二條
 六條ニ據リ二百九十
 二條以上ノ言渡スル
 科料ニ倍ノ如シ之
 金額ニ得ルヤ勿論
 ト儀稱シタルモ科料
 ノ者疑義アリ決兼
 候令相成度此段相
 伺候也
 明治十六年八月
 指令
 治罪法第一條
 十三條ノ各項ニ
 記載シタル科料

ル鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス但呼出ニ應セサル時ハ第二百九十三條
 ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ
 鑑定人ノ鑑定シタル事件ニ付キ説明ノ爲メ更ニ之ヲ呼出ス時ハ證
 人ニ付キ定メタル前數條ノ規則ニ從ヒ處分ス可シ
 第二百九十八條 被告人聾者啞者又ハ國語ニ通セサル者ナル時ハ第
 百五十六條第百五十七條ノ規則ニ從フ
 第二百九十九條 被告人數名ナル時ハ裁判長其意見ヲ述ヘ且檢察官
 其他訴訟關係人ノ意見ヲ聽キ訊問ノ順序ヲ定ム可シ
 裁判長ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ職權ヲ以テ其順序ヲ
 變更スルヲ得
 第三百條 證憑調濟ノ後檢察官民事原告人被告人其辯護人及ヒ民事
 擔當人ハ順次發言ス可シ
 檢察官其他訴訟關係人ノ陳述ハ他ヨリ妨礙スルヲ得ス
 檢察官其他訴訟關係人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スヲ得但辯論ノ最終ニ
 ハ被告人又ハ辯護人ヲシテ發言セシム可シ

罰金ノ範圍ノ二
倍ヲ云フ者ニシ
テ其範圍内ヲ以
テ先キ金額ノ二
タテ金額ノ二倍
ヲ云フ額ノ二倍
科第ニ稱スヘシ
但刑罰第七十
二條第二項ニ依
リ至四十年得
上二圓ヲ得
月明治五十八

第三百一條 檢察官公訴ヲ拋棄スト雖モ裁判所ニ於テハ本案ニ付キ相當ノ裁判ヲ爲ス可シ

第三百二條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタル時ハ裁判所ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ判決ス可シ但其判決ニ對スル控訴又ハ上告ハ本案ノ裁判言渡アリクル後ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第三百三條 民事擔當人ハ始審終審ヲ問ハス何時ニテモ其訴訟ニ關係スルヲ得

又民事原告人ハ民事擔當人ヲシテ其訴訟ニ關係セシムルヲ得若シ異議ノ申立アリタル時ハ其裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ其判決ニ對シテハ本案ノ裁判言渡ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第三百四條 裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ノ明示シ且一切ノ證據ヲ明示ス可シ
免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦同シ

第三百五條 無罪ノ言渡ヲ爲スニハ其理由トシテ被告人ニ對シ犯罪ノ證據ナキヲ明示ス可シ

第三百六條 裁判所ニ於テハ公訴ノ裁判ト同時ニ私訴ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ充分ナラサル時ハ公訴ノ裁判アリタル後其裁判言渡ヲ爲スヲ得

第三百七條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴裁判費用ノ全部又ハ幾分ヲ擔當ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ
免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴裁判費用ハ官ニテ之ヲ擔當ス可シ

私訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當ス可シ
第三百八條 被告人刑ノ言渡ヲ受ケタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物品ハ所有主ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百九條 本案ノ裁判言渡ニ對スル上訴ノ期限内又上訴アリタル

時ハ其判決アルマテ裁判執行ヲ停止ス

第三百十條 禁錮以上ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡シタル時ハ現ニ捕ニ就クニ非サレハ上訴ヲ爲スコト得ス

第三百十一條 勾留ヲ受ケタル者上訴ヲ爲シ又ハ保釋ヲ求ムル時ハ其中立書ヲ監獄長ニ差出シ監獄長ヨリ之ヲ其裁判所ノ書記ニ差出ス可シ

第三百十二條 訴訟關係人又ハ其代人非常ノ變災厄難ニ因リ上訴期限ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ證明シタル時ハ期限ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコト得但變災厄難ヲ免カレタルヨリ通常ノ期限内ニ其證據ヲ中立書ニ添へ上訴ヲ爲ス可シ

第三百十三條 書記ハ速ニ前條ノ中立書ヲ對手人ニ送達ス可シ對手人ハ三日内ニ答辯書ヲ差出スコト得

上訴ヲ判決ス可キ裁判所ニ於テハ會議局ニテ檢察官ノ意見ヲ聽キ先ツ其上訴ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

上訴ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヲシテ其旨ヲ訴訟關係

人ニ通知セシメ通常ノ規則ニ從ヒ本案ノ裁判ヲ爲ス可シ

上訴ヲ受理ス可カラサル者ト判決シタル時ハ他ノ原由アルニ非サレハ即時ニ裁判執行ヲ爲サシム可シ

第三百十四條 裁判言渡ハ辯論ヲ終リタル後公廷ニ於テ即時ニ之ヲ爲シ又ハ次日ニ之ヲ爲ス可シ

裁判言渡書ハ其言渡前裁判官之ヲ作り書記ト共ニ署名捺印ス可シ
裁判言渡書ニハ其言渡ヲ爲シタル裁判所年月日其事件ニ干預シタル檢察官ノ氏名ヲ記載ス可シ

第三百十五條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ求ムルコト得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタル時ハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第三百十六條 對審裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其言渡ニ對シ控訴又ハ上告ヲ爲スコト得可キト及ヒ其期限ヲ告知シ又闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡アリタル時ハ其言渡ニ對シ故障ヲ爲スコト得可キト及ヒ其期限ヲ言渡

書ニ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキ時ハ通常ノ規則ニ從ヒ其告知アルマテ上訴期限ノ經過ヲ停止ス

第三百十七條 書記ハ各事件ニ付キ各別ニ公判始末書ヲ作り左ノ條件其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

一 裁判ヲ公行シタルヲ又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡アリタルヲ及ヒ其事由

二 被告人ノ訊問及ヒ其陳述

三 證人鑑定人ノ陳述及ヒ宣誓ヲ爲シタルヲ若シ宣誓ヲ爲サ、ル時ハ其事由

四 原被ノ證據物件

五 辯論中異議ノ申立アリタルヲ後日ヲ期シテ申立ツ可キ事件ヲ申立タルヲ是等ノ事件ニ付キ檢察官其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ判決

六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ發言セシメタルヲ

第三百十八條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル條件ノ外言渡ヲ爲シタル裁判所年月日裁判長陪席判事檢察官及ヒ書記ノ氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ涉ル時ハ其旨及ヒ同一ノ裁判官出席シタルヲ記載ス可シ

辯論中豫備判事ヲシテ代ラシメタル時ハ其旨ヲ記載ス可シ檢察官及ヒ書記ニ付テモ亦同シ

第三百十九條 公判始末書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ書記署名捺印ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アル時ハ其紙尾ニ記載ス可シ

第三百二十條 裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ正本ハ其裁判所ノ書記局ニ保存ス可シ

上訴アリタル時ハ裁判長及ヒ書記裁判言渡書及ヒ公判始末書ノ謄本ニ認印シ之ヲ上訴書類ニ添フ可シ

第二章 違警罪公判

第三百二十一條 違警罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
二 豫審判事又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百二十二條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ケ可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時被告事件及ヒ代人ヲシテ出廷セルムルヲ得可キ旨ヲ記載ス可シ若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未タ其證人ヲ呼出サ、ル時ハ公庭ニテ其事件ノ告知ヲ受ケタル後其呼出及ヒ辯護ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルヲ得

第三百二十三條 呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ

第三百二十四條 違警罪裁判官ハ被告事件急速ヲ要スル時ハ公判ニ取掛ル前檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ對手人ノ立會ヲ要セスンテ檢證處分ヲ爲スヲ得

○ 司法省 縣 刑科
○ 神奈川 拘留ノ刑科
○ 違警罪 拘留ノ刑科
○ 料又ハ 拘留ノ刑科
○ 處シタル者 其裁判
○ 全ク過誤ニ出テ入
○ 然ルニ失シタル事 確
○ 手續ヲ以テハ便宜ノ
○ 裁正致シ不苦候
○ 指令 明治十六年十
○ 一月二日

第三百二十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出廷シタル者ト雖モ訊問前其名刺ヲ書記ニ差出シタル時ハ裁判所ニ於テ證人トシテ其陳述ヲ聽クヲ得

第三百二十六條 書記ハ各事件毎ニ訴訟關係人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ若シ其呼立ニ應セサル時ハ他ノ事件ノ裁判ヲ終リタル後其事件ヲ裁判ス可シ

第三百二十七條 違警罪裁判官ハ最初ニ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

官吏ノ作リタル調書又ハ申立書アル時ハ書記之ヲ朗讀ス可シ 檢察官ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第三百二十八條 違警罪裁判官ハ被告人ニ被告事件ヲ承認スルヤ否ヲ訊問ス可シ 若シ被告人代人ヲ以テ白狀ヲ爲ス時ハ其署名捺印シタル書面ヲ差出ス可シ

第二百二十九條 被告人ノ白狀アリタル時ハ他ノ證憑ヲ差出スニ及
ハス但裁判所ニ於テハ檢察官民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ
以テ之ヲ差出サシムルヲ得

若シ白狀ナキ時ハ原被ノ證人ヲ訊問シ其他證憑アル時ハ之ヲ差出
ス可シ

第三百三十條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ被害事件ヲ證明シ及ヒ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
被告人民事擔當人又ハ其代人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百三十一條 呼出ヲ受ケタル被告人民事擔當人又ハ其代人出廷
セサル時ハ檢察官及ヒ民事原告人ノ請求スル所ヲ聽キ闕席裁判ヲ
爲ス可シ

民事原告人出廷セサル時亦同シ

第三百三十二條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ
因リ闕席シタル者又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

闕席裁判ヲ受ケタル者故障ヲ爲サントスル時ハ言渡書ノ送達アリ

タルヨリ三日内ニ其中立書ヲ書記局ニ差出ス可シ

第三百三十三條 裁判所ニ於テハ先ツ故障ノ申立ヲ受理ス可キヤ否
ヲ判決ス可シ若シ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ書記ヨリ故障ア
リタルヲ及ヒ其事件ヲ公判ニ付ス可キ日時ヲ故障ノ對手人ニ通知
スル爲メ呼出狀ヲ送達ス可シ但其送達ト出廷トノ間少クトモ二日
ノ猶豫アル可シ

又公判ニ付ス可キ日時ヲ其前日ニ故障ノ申立人ニ報知ス可シ

第三百三十四條 故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ第三百二十
六條ヨリ第三百三條十マテノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ
其裁判ニ闕席シタル者ハ故障ヲ爲スヲ得ス

第三百三十五條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ
言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 被告事件違警罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ
從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百二十七條 被告事件重罪又ハ輕罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ其事件ヲ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可シ但被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルヲ得

第三百二十八條 違警罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ニ控訴スルヲ得

一 被告人ハ拘留ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時

二 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上治安裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時

三 檢察官其他訴訟關係人ハ上ニ記載シタル原由アラサル時ト雖モ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時

第三百二十九條 控訴ヲ爲サントスル者ハ密裁判所ノ書記局ニ其中立書ヲ差出ス可シ但其申立ノ期限ハ對審裁判ニ付テハ言渡ヨリ三日内又闕席裁判ニ付キ故障アラサル時ハ本人又ハ其住所ニ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

控訴ヲ爲スノ申立アリタル時ハ書記ヨリ其旨ヲ對手人ニ通知ス可

シ

第三百四十條 訴訟ニ關スル一切ノ書類ハ檢察官ヨリ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ書記局ニ之ヲ送致ス可シ

若シ檢察官控訴ノ申立人又ハ對手人ナル時ハ控訴ヲ受ク可キ裁判所ノ檢察官ニ其意見書ヲ差出ス可シ

第三百四十一條 控訴ヲ受ク可キ裁判所ニ於テハ書記局ヨリ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタル後其裁判ニ取掛ル可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百四十二條 控訴ノ對手人ハ其裁判言渡アルマテ何時ニテモ附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得但附帶ノ控訴ハ公廷ニ於テ直チニ之ヲ申立ルヲ得

第三百四十三條 控訴ニ係ル事件ハ輕罪ノ裁判ヲ爲スニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判ス可シ

○
 違事付違 山司
 本警檢山 形法
 年罪事請 輕省
 六上請訓 罪裁
 月告ノ 邊儀
 伺渡ノ 對檢
 則＝ 對檢
 規＝ 對檢
 律＝ 對檢
 科＝ 對檢
 則＝ 對檢
 刑處＝ 對檢
 依單長本 行ヨ六
 者拘留法 雖輕本
 期多ト 雖輕本
 長ルリ 雖輕本
 上圍者 雖輕本
 告内期 雖輕本
 但チ多 雖輕本
 全書為 雖輕本
 在ハス 雖輕本
 違長 雖輕本
 警短 雖輕本
 得ハ上 雖輕本
 多寡シ 雖輕本
 罪多寡 雖輕本

檢察官其他訴訟關係人ハ裁判長ノ允許ヲ得ルニ非サレハ新ナル證人又ハ始審ニ於テ陳述シタル證人ヲ呼出スヲ得ス。
 第三百四十四條 控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ原裁判言渡ヲ認可スルノ言渡ヲ爲シ又ハ之ヲ取消シ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ
 被告人ノミ控訴ヲ爲シタル時ハ原裁判言渡ヨリ重キ刑ヲ言渡スヲ得ス
 私訴ニ付テノ控訴ノ裁判ハ通常民事ノ規則ニ從フ
 第三百四十五條 第三百三十一條以下ノ規則ハ控訴ノ開席裁判ニ付テモ亦之ヲ適用ス
 第三百四十六條 檢察官其他訴訟關係人ハ違警罪事件ノ終審ノ對審裁判言渡ニ對シテ上告ヲ爲スヲ得
 第三章 輕罪公判
 第三百四十七條 輕罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス
 一 檢察官ノ請求ニ因リ書記局ヨリ被告人ニ對シ發シタル呼出狀
 二 豫審判事輕罪裁判所會議局又ハ上等ノ裁判所ノ判決ニ因リ其事

御ノ見込ノ通例ト
 御ハ内証ノ二條規
 第四則第ニ條規
 高壹錢ノ十倍若稅
 金拾錢ハ或ハ二拾
 處スルハキモ拾錢
 レサハ儀告ナサナ
 哉又ハ其多可許之
 ナキモ所犯ノ事實
 ニ依リモ數百圓ニ至
 罪ノ圍ニ付全違警
 サルモ範圍ニ在ラ
 内可然モ此段仰御
 訓明也此段仰御
 二月三十日
 請訓ノ趣前段見
 解額ニ通シテ二圓
 多額ニ通シテ二圓

件ヲ移スノ言渡
 第三百四十八條 呼出狀ニ付テハ第三百二十二條第三百二十三條ノ規則ニ從フ
 第三百四十九條 被告事件罰金ノ刑ニ該ル可キ時ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得可キ旨ヲ呼出狀ニ記載ス可シ
 民事原告人及ヒ民事擔當人ハ代人ヲシテ出廷セシムルヲ得
 第三百五十條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クスモ一日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ
 第三百五十一條 第三百二十四條ノ規則ハ豫審ヲ經サル輕罪事件ニモ亦之ヲ適用ス
 第三百五十二條 檢察官ハ裁判長ヨリ被告人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地ヲ問ヒタル後被告事件ヲ陳述ス可シ
 民事原告人ハ被害事件ヲ證明ス可シ
 調書又ハ申立書アル時ハ書記ヲシテ之ヲ朗讀セシメ次ニ原被證人ノ陳述ヲ聽キ且證據物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

以上ノ罰金ニ該
ル可キ者ナルハ
ハ上告ヲ爲スル
ヲ得ヘシ
明治十六年十
二月廿一日

被告人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

民事原告人ハ要償ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ民事擔當人ハ更ニ答辯ヲ爲ス可シ得

第三百五十四條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人又ハ第二百六十九條ノ

規則ニ從ヒ闕席裁判ヲ爲ス可シ得可キ被告人其呼出ノ日時ニ出廷

セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十五條 闕席裁判ニ關スル第三百二十一條ヨリ第三百三十

四條マテノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス

第三百五十六條 闕席裁判ニ因リ禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル被告人

ハ左ノ場合ヲ除ク外刑ノ期滿免除ニ至ルマテ故障ヲ爲ス可シ得

一被告人本案ノ裁判前豫メ裁判ス可キ事件ヲ申立タル時

二裁判言渡書ヲ本人ニ送達シタル時

三被告人裁判執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルヲ知リタルノ證アル

時

第一ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ第二第三ノ場合ニ
於テハ言渡アリタルヲ知リタル三日内ニ故障ヲ爲ス可シ得

第三百五十七條 裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ

檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ新ナル證人ヲ

呼出シ鑑定人ヲ命シ若シハ臨檢ヲ爲ス可シ得但是等ノ處分ヲ爲ス

ニ付テハ第三編第三章ニ定メタル規則ニ從フ

又豫審ヲ經サル事件ニ付テハ豫審判事ヲシテ其指示スル所ノ條件

ニ付キ取調ヲ爲シ且其報告書ヲ差出サシムルヲ得

第三百五十八條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ裁判所ニ於テ無罪ノ

言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ放免ノ言渡ヲ爲ス可

シ

第三百五十九條 被告事件違警罪ナル時ハ終審ノ裁判言渡ヲ爲シ且

被告人勾留ヲ受ケタル時ハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百六十條 被告事件重罪ナル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲シ若シ豫審ヲ經サル時ハ豫審判事ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ但被告人勾留ヲ受ケサル時ハ勾引狀ヲ發ス可シ
 訴訟書類及ヒ證據物件ハ檢察官ヨリ之ヲ豫審判事ニ送致ス可シ
 第三百六十一條 被告事件豫審ヲ經タル時ハ之ヲ其裁判所ノ會議局ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ
 會議局ニ於テハ第二百五十三條第二百五十五條ノ規則ニ從ヒ取調ヲ爲シ被告人ヲ管轄裁判所ニ送付スルノ言渡ヲ爲ス可シ
 第三百六十二條 會議局ノ言渡ニ因リ事件ヲ受理シタル場合ニ於テ新ナル證據ヲ發見スルコトナクシテ其事件ヲ重罪ナリトスル時ハ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ
 檢事ハ大審院ニ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ス可シ
 第三百六十三條 前二條ノ場合ニ於テハ會議局又ハ大審院ノ判決アルマテ檢察官ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ被告人ヲ其裁判所ノ監倉ニ留置スルノ言渡ヲ爲スコトヲ得

○司法省 秋田 檢事 附帶 裁判所
 茲 檢事 附帶 裁判所
 被私 告事 爲シタル
 官其 後私 訴裁 判
 ナル 爲私 訴裁 判
 官通 報ノ 爲シタル
 官故 同官 報ノ 爲シタル
 クル 言テ 私官 報ノ 爲シタル
 ナリ 言テ 私官 報ノ 爲シタル
 ナリ 言テ 私官 報ノ 爲シタル
 條 治罪 法第 三十五 條
 ル 治罪 法第 三十五 條
 於テ 以テ 法第 三十五 條
 十 五 條 第 四 項 越 權

又第二百十條以下ノ規則ニ從ヒ保釋ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得
 第三百六十四條 被告事件輕罪ニシテ且證據充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ
 被告人禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ當然保釋責付ヲ取消シタル者トス但上訴中更ニ保釋ヲ求ムルコトヲ得
 第三百六十五條 檢察官其他訴訟關係人ハ左ノ區別ニ從ヒ輕罪裁判所ノ裁判言渡ニ對シ控訴裁判所ニ控訴スルコトヲ得
 一 檢察官ハ無罪免訴又ハ刑ノ言渡アリタル時但違警罪事件トシテ言渡アリタル場合ニ於テハ其事件ヲ輕罪ナリトスル時
 二 被告人ハ違警罪ニ付テノ言渡ヲ除クノ外刑ノ言渡ヲ受ケタル時
 三 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ要償ニ付テノ言渡民事上始審裁判所ノ終審ノ金額ヲ超過シタル時
 四 檢察官其他訴訟關係人ハ管轄違越權擬律ノ錯誤又ハ無效ノ記載アル規則ニ背キタル時
 第三百六十六條 控訴ハ裁判言渡アリタルヨリ五日內ニ之ヲ爲ス

トノ處置アルナ理由
 勿論ト存候得
 同法第三十六條ノ
 共同第四項ハ刑
 言條第四項ハ越
 言分ニ關シタル
 合モ限リ適用ス
 キモ刑ノシテ檢
 官裁事附帶ノ私
 訴裁言渡キ對シ
 控訴規定如キハ
 項ノスルキ所本
 論者アリト云フ
 也論者御内訓義
 内訓
 明治十七年四月
 月十七日

ヲ得
 闕席裁判ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障
 ナ爲サズシテ直チニ控訴ヲ爲スヲ得但第三百五十六條ノ場合ニ
 於テハ五日內ニ之ヲ爲ス可シ
 第三百六十七條 公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴アリタル場合ニ於テ被
 告人勾留ヲ受ケタル時ハ檢察官ヨリ之ヲ控訴裁判所ノ監倉ニ移ス
 可シ
 第三百六十八條 第三百三十九條ヨリ第三百四十二條マテ及ヒ第三
 百四十四條ノ規則ハ此章ニモ亦之ヲ適用ス
 第二百六十九條 輕罪裁判所檢事ノ控訴又ハ檢事長ノ附帶ノ控訴ア
 リタル場合ニ於テ被告事件ヲ重罪ナリトスル時ハ第二百五十五條
 ノ規則ニ從ヒ會議局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ
 第三百七十條 控訴ノ闕席裁判及ヒ其故障ニ付テハ始審ノ闕席裁判
 及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ從フ
 第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判所ノ終審ノ對審

裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタル時ハ左ノ區別
 ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作ル可シ
 始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開ク時ハ檢事長公訴狀ヲ作り又ハ
 重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ
 第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

- 一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様
- 二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地
- 三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證憑

四罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ概略

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作リタル上ニテ各別ニ辯論ヲ爲スコトヲ裁判所長ニ請求スルヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルヲ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件

ニ付キ被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ

若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨリ之ヲ改選ス可

キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シタル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ訊問ノ調書ヲ作リ辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

終局ニ至ル迄被告
其ノ上告メニ利益
ハ上告モ爲サシム
ハシ治罪法第一三
八十一條第一項ノ
明文ハ辯護人ハ唯
辯論ヲ爲ス時ニ限
ルモ法廷ノ辯護人
モ見廷上ノ辯護人
資格ヨリモ辯護人
公判終局迄ハ辯護
人其罪ヲ辯護スル
テハ關係人トシテ
謂ハレサレバ得ル
等ノ關係人トシテ
ノ辯護人トシテハ
カシテ辯護人トシ
テ法廷ノ辯護人ト
取テモ被告ノ利益
故ニ裁判官ノ見

被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論ヲ爲ス可シ
第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼立ツ可シ
其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲スニ當リ順次ニ
之ヲ呼入ル可シ
第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシムルコト付キ注
意シテ聽ク可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ
第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタル後被告人ヲ訊
問ス可シ
被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之ヲ取消サントス
ル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ
被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可カラス
第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後證憑ヲ差出スニ
從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出
スヲ得可キコトヲ被告人ニ告知ス可シ
第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル毎ニ被告人ニ意

當日辯護人疾病等
キハ辯護人ノ資格
ナシトシテハ辯護
人トシテ出廷セテ
代メト爲シ出廷セ
シメ候モハ治罪法
ノ精神ニ相違シ如
可申存候ハ適法
何相心得可然キ
急御指揮仰候
也

○ 指令
一 明治十六年十
月廿九日
二 明治十六年十
月十六日
三 明治十六年十
月四日

○ 大司省
大司省 訴訟裁判所
重審判事 事件ニ付
像審判事 於テ之
ス重罪裁判所ニ移
罪言渡ヲ爲シ治
法第二十七條
條從ヒ控訴裁判

見アリヤ否ヲ問フ可シ
第三百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判
長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス
陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルコト又
證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルコトヲ請求スルヲ得
裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲スコトヲ得
第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ
於テ充分ナル陳述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官
民事原告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ
退席セシムルコトヲ得
裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述
シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ
第三百九十六條 裁判長ハ第三百九十五條ニ定メタル手續ノ終リタル後公
訴ニ付キ辯論ノ終結シタルコトヲ言渡ス可シ
第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付

所開庭ノ指揮シタル豫審ノ爲シ
 豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪
 裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書
 ナ差出サシム可シ
 第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
 第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲
 メ其意見ヲ陳述ス可シ
 被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辨論スルヲ得
 第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ
 其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ
 爲スヲ得
 檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
 裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉庭前之ヲ判決ス
 可シ
 第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ
 言渡ヲ爲ス可シ

キ豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪
 裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書
 ナ差出サシム可シ
 第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
 第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲
 メ其意見ヲ陳述ス可シ
 被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辨論スルヲ得
 第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ
 其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ
 爲スヲ得
 檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
 裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉庭前之ヲ判決ス
 可シ
 第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ
 言渡ヲ爲ス可シ

所開庭ノ指揮シタル豫審ノ爲シ
 豫審ヲ求ムルヲ得裁判所ニ於テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪
 裁判所ヲ開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書
 ナ差出サシム可シ
 第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
 第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察官法律適用ノ爲
 メ其意見ヲ陳述ス可シ
 被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サルヲ辨論スルヲ得
 第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告人ハ私訴ニ付キ
 其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ
 爲スヲ得
 檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ
 裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉庭前之ヲ判決ス
 可シ
 第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ法律ニ從ヒ刑ノ
 言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被
 告人ヲ放免ス可シ
 第四百一條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ言渡ヲ爲シ且被告
 人ヲ放免ス可シ
 又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ裁判言渡ヲ爲ス
 可シ
 第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶セサル他ノ重罪
 輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ
 開キタル裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ
 於テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ
 第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ對審裁判言渡ニ
 對シ上告ヲ爲スヲ得
 第四百四條 闕席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ公訴狀及ヒ必要
 ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ
 檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告人ハ要償ニ付キ

定スルモ未タ管轄ノ
重罪ニ至ラズニ
期ニ至ルハ
類ノ檢事ハ
致シテ檢事ハ
原裁判所ノ
倉留置ノ場
在テハ原裁判
ナ豫審ヲ爲シ
輕罪ニ對シテ
許テ然ラハ該
判所長ノ掌ニ
ヨリ其事件ノ
サリテ未ダ會
スルヤモ既ニ
カテ致シテ檢
ツ書類モ檢事
長ニ送ラレタ
ナレハ該檢事
ニ於テハ該檢
スルハ該檢事
愚考セリ又未
罪裁判所開廳ノ
期重

意見ヲ陳述ス可シ
民事擔當人ハ答辯スルヲ得
第四百五條 闕席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ
本人又ハ其住所ニ送達ス可シ
第四百六條 闕席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢察官ニ非サレハ
上告ヲ爲スヲ得ス
民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ
得
第四百七條 闕席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除
ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲スヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日
内ニ故障ヲ爲ス可シ
第四百八條 故障ノ申立ハ闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲
ス可シ
重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ
其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常

長ニ至ラサルモ檢事
テ可キ重罪ニ對シ
ス下トシテ在ル監
ノ移シ置シテ檢事
ニ移シ置シテ檢事
未タ重罪ニ對シテ
セサルハ檢事
ノ裁判所長ニ於テ
之カ允テ得ル儀
ホ有テ即チ輕罪
裁原裁判所長ノ許
受ル所長ノ許テ裁
指令 月十日
審判所附ケテ被告
在ル時ハ其裁判
所長ノ許テ受
ケ重罪ニ對シテ
ノ重罪ニ對シテ
ノ重罪ニ對シテ

ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ
第四百九條 闕席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄
スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ
控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ
規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ
第五編 大審院ノ職務
第一章 上告
第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ左ノ場
合ニ於テ上告ヲ爲スヲ得
一 法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時
二 裁判所ノ構成規則ニ背キタル時
三 法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ管轄ニ非サル裁
判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタル時
四 法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又ハ無効ノ記載ナ
キ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認

ル時ハ其開廳ス
ヘキ始審又ハ控
訴裁判所長ノ允
許ヲ受クル儀ト
心得ヘシル儀ト
明治十七年三
月廿五日

可セサル時

五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權

ヲ以テ判決スルコトヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件

ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナクシテ訊問及ヒ

辯論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬ノル

時

十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ

判益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルコト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄

違アリト雖モ上告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ニ關スル豫
審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ
爲スコトヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附
帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得

大審院事檢長モ亦附帶ノ上告ヲ爲スコトヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ
送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保
釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除クノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記
局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對
手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書

ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シタル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日内ニ大審院檢察長ニ差出シ且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ差出スヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察官ヨリ重罪ノ刑

ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタ

ル者自ラ代言人ヲ選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代

言人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ但自己ノ意見

ヲ付ス可カラス

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事ノ報告書ヲ差出

スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差

出スヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタル時ハ之ヲ其報

告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ
私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受

○ 司法省 開始 裁判所
 第一條 公判ニ對シテ大
 審院ニ於テ之ヲ破毀シ
 乙於テ之ヲ破毀シ
 破毀シタル時
 移シタル事件
 一ノ切書類ヲ送
 致スル手續ヲ
 段テ正シキ手續
 以テ或ハ甲乙其
 所ヨリ直チニ裁
 移サシタル乙裁
 判所ニ送致スル
 長ノ或ハ送致ス
 所ノ檢事ハ乙裁
 人ト共ニ送致ス
 乙於テ檢事ハ送
 於テ檢事ハ送

理セサルニ因リ原裁判言渡ヲ破毀シタル時ハ其事件ヲ移ス

ク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場
合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時 大審院ニ於テ其上告ニ係ル
部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件
ヲ他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡
ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム
可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス
ノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示
ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

人ヲ撰任セシムルハ之ヲ合ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ル
 ○明治十六年十月廿八日
 大審院檢察長ヨリ
 治罪法第四百四十九條
 言渡ヲ受ケタル時ハ其
 親屬ヨリ再審ノ旨ヲ訴
 規ニシテ得ヘキ旨ヲ訴
 百四十六條ニ於テ四
 再審ノ訴ヲ親屬ヨリ
 トル場合ニ於テ云々
 大審院檢察長ヨリ
 該文面上ヨリケレノ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ大
 審院ニテ再審ノ原由アルコトヲ認メタル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ
 移スコトナク原裁判言渡ヲ破毀ス可シ
 第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時又ハ前條
 ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其
 言渡書ヲ揭示公告ス可シ
 第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴
 第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハス管轄ニ非サル
 ノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變
 ニ因リ訴訟事件ヲ管理スルコト能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人
 ニヨリ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得
 大審院檢察長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲スコトヲ
 得
 第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意

内相ハ有官有親
 内訓決聊スニ屬
 月明チシカニ於
 十五治仰兼疑ノ
 日七キ候義道モ
 年七候ニニ理訴
 四也付涉ナ權檢
 御リレヲ察ヲ
 也シ可訴ニ請訓
 此旨儀トスモ再
 月明治十七年四
 廿一日

書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ
 第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ
 專任判事ノ報告書及ヒ檢察長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ
 訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ
 第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴
 第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大
 ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公
 安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得
 第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因
 リ大審院檢察長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ
 第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽
 シコトナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可シ
 第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁
 判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ
 同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得

民事原告人嫌疑ノル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヲ得

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

○ 司法省
 松山始審裁判所
 本條第二號
 以テ罪ノ控訴ヲ
 計ハレテ同布告
 第三條第四條ニ
 定テ豫納金
 當リテ控訴ニ係
 ル裁判執行ハ何
 ノ裁所ニ於テナ

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命テ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

スルハ豫無論原裁判領
 合判訴ナニ所判所所ノニ命官ク條罪凡ニ茲ノス
 ルノアチハリ於即ノナハニ因ノヲ又原二條罪凡ニ茲ノス
 ハ豫無論原裁判領
 合判訴ナニ所判所所ノニ命官ク條罪凡ニ茲ノス
 ルノアチハリ於即ノナハニ因ノヲ又原二條罪凡ニ茲ノス

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム
 第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ闕席裁判アリタル時ハ其刑ノ
 言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス
 可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁
 判所ノ書記之ヲ作ル可シ
 一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地
 二 罪名刑名
 三 再犯
 四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日
 五 對審裁判又ハ闕席裁判
 第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一
 通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ
 違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ
 第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ
 申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シ

レ裁ニ訴原竟ノ法者キ於即於シ原リ意ル場ノル六加タ所
 ハ判對裁裁大原第ハモテ於即於シ原リ意ル場ノル六加タ所
 控所シ判判大原第ハモテ於即於シ原リ意ル場ノル六加タ所
 訴ナテ所所院判百ニナリチ行審モ審所ニニ命官ク條罪凡ニ茲ノス
 裁リハモニ對ト拾シトナス所ニニ命官ク條罪凡ニ茲ノス
 判何即亦シ對ト拾シトナス所ニニ命官ク條罪凡ニ茲ノス
 ニトチ同テスハ必條罪論ヘニ所ニニ命官ク條罪凡ニ茲ノス
 對十原院控ル必條罪論ヘニ所ニニ命官ク條罪凡ニ茲ノス

タル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ
 第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合
 ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メ
 タル裁判所ニ送致ス可シ
 裁判所ニ於テ本犯ナルコトヲ認定スルコト能ハサル時ハ事實參考ノ爲
 メ會テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼
 出スコト得
 第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタ
 ル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡
 ニ對シテハ上訴ヲ許サス
 第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ
 其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ
 第二章 復權
 第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタ
 ル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ

モ直リモ如律律カ始ル即條罪ストハ所以上ス裁異ハニル一
 ノナ旁亦シノ意如審原チノ法ル同全ニ上ヘ判ニ大係所層
 トニ控前實見コキノ裁大原第モ一ク有ニ兩キ所ニ審ルナノ
 思執訴述際解非モ控判審裁四ノノ乙之論モコテ院裁リ不
 量行裁ノ上既スノ訴所ニニ所百ニ意論ノノ於直ノ判依便
 致ス判如ノコトヲニニニ拾六シ見者處派ナテニ裁ノテチ感
 候ヘ所ク便此ス指於シ對ト拾六シテテ執控
 得キニ然益ノ法スルテスハ貳治持說官ト行訴

意見書ヲ添フ可シ
 特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス
 可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ
 申立ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除ク外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡
 ナ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シ
 タル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百

七十六條ノ規則ニ從フ

○第二章

○第一款

第一節

書類送達外六項

○十四年九月第四十六號布告

共又拾貳條ハ實際ノ
 六拾貳條ハ實際ノ
 便否ニ拘ハラズ所
 謂原裁判所ハ特
 大審院ニ對スル場
 合ナリ
 或ハ控訴裁判所
 對スル場合モ包
 合スルヤ
 指合
 令ノ趣
 伺ノ趣
 判言ノ趣
 ル裁判所ニ於テ
 執行スル儀ト心
 得可シ
 明治十八年二月
 月廿四日

書類送達ニ付治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及
 其儀候事

○ 治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内
 犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其
 被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

○ 治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當分ノ内ニ
 名ト相定候事

○ 治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料ス
 ヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ准シ處分スルコトヲ得

○ 治罪法第二百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居八寄
 席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲

ス時間又旅籠屋貸坐敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索致シ苦シカラ
ス

○ 治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルコトヲ許
シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルコトヲ得

○ 治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルコトヲ得サ
ル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限り令狀ヲ發シ苦シ
カラヌ

第二節

普通治罪法ト陸海軍治罪法

ト交渉事件ノ處分

○ 十八年五月第拾貳號布告

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從
前ノ成規中本則ニ抵觸スルモノハ當分施行セス

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若シハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普

通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルキハ軍人ハ軍法會議ノ判
法ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍術ニ於テ共犯人ヲ逮捕
シタルキハ常人ハ審問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ管轄普通裁判所檢
事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審
問ノ上證據書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若シハ陸海軍檢察官ニ
送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若シハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ
重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス
シコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ
於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普
通裁判所ノ言渡ニ對シ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ
上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限
ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人闘毆殺傷其他疑讞ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

第三節 輕罪裁判所ノ管轄

○十五年六月司法省丙第二十一號達

被告事件重罪ナル時ト雖モ法律上ノ減輕ニ因リ輕罪以下ノ刑ニ處ス可キ者ハ總テ輕罪裁判所ノ管轄ニ屬スル儀ト心得可シ此旨相達候事

第四節 辯護人ヲ用井サル言渡

○十五年一月第一號布告

治罪法第三百八十一條第一項ニ若シ辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ノ効ナカルヘシト有之候得共其裁判所々屬ノ代言人無之場所ニ於テハ當分ノ内辯護人ヲ川ヒサルモ其刑ノ言渡ハ無効ノ限リニ在ラス

第五節ノ一 豫審判事ノ訊問

○十六年三月第八號布告

豫審判事裁判所ニ於テ豫審ヲ爲ス時ハ當分ノ内書記ノ立會ナクシテ被告人證人ヲ訊問スルコトヲ得

第五節ノ二 被告人訊問時限

○十五年十一月第五拾三號布告

治罪法第二百六條第二百七條中二拾四時内ト有之處已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内五日以内ニ於テスルコトヲ得

第五節ノ三 勾引シタル被告人

○十四年十月第五十九號布告

治罪法中豫審判事勾引狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置クヘシ此旨布告候事

第六節 違警罪即決例

○十八年九月第三十一號布告

明治十四年九月第四十四號布告及ヒ同年十月第八十號布告ヲ廢止シ違

警罪即決例別紙ノ通制定ス右奉 勅旨布告候事

違警罪即決例

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直ニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡シニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經ヌシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡

アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡シヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、ル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ避クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シテ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日チ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

參考

○十四年第四十四號布告

違警罪ノ審判ニ關スル一切之手續ハ治罪法ニ從フヘシト雖モ實際已ムヲ得サル場合ニ於テハ當分ノ内便宜取計ラヒ其裁判言渡ニ付テハ總テ上訴ヲ許サス此旨布告候事

○十四年九月第四十八號布告

刑法治罪法中違警罪裁判ノ儀ハ當分三府五港ノ市區ヲ除クノ外府縣警察署又ハ警察分署ニテ裁判可致候條此旨布告候事

○十四年十二月第八十號布告

本年(九月)第四十八號布告左之通改正ス

違警罪ノ儀ハ本年第三十六號布告ニ據リ明治十五年一月一日ヨリ治安裁判所ニ於テ裁判スヘキ處當分ノ内府縣警察署及ヒ其分署ニ於テ裁判セシムヘシ

○第二款

第一節

豫審ヲ要セサル輕罪

○十四年十月第五十四號布告

刑法治罪法實施ノ儀布告候ニ付テハ當分ノ内輕罪ニシテ檢察官ニ於テ豫審ヲ要セスト見込ムモノニ限り始審裁判所々在ノ地ヲ除ク外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開キ其裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ此旨布告候事

但本文ノ場合ニ於テ訟廷内治罪ノ手續ハ便宜可取計且其手續上ニ付テハ上訴ヲ許サス

第二節

輕罪裁判所開廷

○十四年十二月第七十七號布告

本年(十月)第五十四號ヲ以テ輕罪ニシテ豫審ヲ要セサルモノニ限リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クヲ得ヘキ旨布告候處當分ノ内相川豐岡洲本田邊脇町高山西郷半戸福江巖原天草大島大曲八戸ノ各治安裁判所ニ於テハ輕罪裁判所ヲ開キ總テノ輕罪ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ

但本文ノ場合ニ於テ訟庭内治罪ノ手續等ハ本年第五十四號布告但書ノ通タルヘシ

第三節ノ一 警部檢事ノ代理

○十四年十二月第七十一號達

治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開ク時ハ當分ノ内其所在ノ地警部ヲシテ檢事ノ職務ヲ代理セシム

第三節ノ二 巡查警部ノ代理

○十四年十月司法省第五號布達

新法實施ノ後ハ司法警察事務上時宜ニ依リ巡查ヲシテ警部ノ代理ヲ

爲サシムル儀モ可有之候此旨布達候事

第四節ノ一 令狀

○十四年十二月司法省丁第廿八號達

治罪法中ニ掲ケタル送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀及宣誓書式別紙ノ通相定候條右ニ照準スヘシ此旨相達候事

別紙 用紙美濃紙ノ類 輪廓寸法凡 横七寸五分 縦五寸四分

〔〕ヲ施スモノ何裁判所トアル角印 并割印ハ總テ朱以下同シ

送達書

- 〔一〕送達スヘキ書名 壹冊
 - 〔二〕同 壹通
- 右使丁ヲ以テ〔何府縣下何町又ハ何國何郡何村何番地何某〕〔送達セシムル者也

受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事	由	送達シタル月	日時	送達シタル場所

明治 年 月 何裁判 所之日印		親屬雇人若クハ戸長へ書類ヲ渡シタル時ハ其事由 右致送達候也 使丁 (氏名印)	
〔何〕裁判所 書記(氏名印)		編者云送達書ハ二通ヲ作り割印ヲナシ一通ヲ受取人へ渡シ一通ヲ書記局へ還納スルモノトス以下同シ 呼出狀 此呼出狀ハ出頭ノ節書記局ニ差出ス可シ	
〔住所身分職業〕 (氏名)		受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由 送達シタル月日時 送達シタル場所 親屬雇人若クハ戸長ニ渡シタル時ハ其事由	
右(云々)ノ事件ニ付證人トシテ相尋ル儀有之來ル〔何月日時〕所ニ出頭可致者也 但同日時出頭セサルニ於テ		右之通取扱候也 明治 年 月 日 使丁(氏名印)	

〔住所身分職業〕 (氏名)		受取人ノ署名捺印若シ能ハサル時ハ其事由 送達シタル月日時 送達シタル場所 親屬雇人若クハ戸長へ書類ヲ渡シタル時ハ其事由	
右(云々)ノ事件ニ付訊問ノ筋有之〔何月日時〕當裁判所ニ出頭可致者也 明治 年 月 何裁判 所之日印		〔何〕裁判所 豫審判事(氏名印) 書記(氏名印)	
召喚狀 ハ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルコトアルヘシ 明治 年 月 何判事 所之日印		右之通取扱候也 明治 年 月 日 使丁(氏名印)	

〔何〕裁判所

豫審判事〔氏名印〕
書 記〔氏名印〕

右之通取扱候也

明治 年 月 日

使丁〔氏名印〕

〔檢事官印〕 勾 引 狀

〔住所身分職業〕

〔氏 名〕

〔若シ氏名分明ナラサ
ルキハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付訊問ノ筋
有之裁判所へ勾引ス可キ者也
但本人潜匿シタル時ハ家宅
ヲ搜索スヘシ

明治 年 月 日
何裁判
所之印

〔何〕裁判所
豫審判事〔氏名印〕
書 記〔氏名印〕

勾引シタル被 告人ノ署名捺 印若シ能ハサ ル時ハ其事由	執行シタル月 日時	執行シタル場 所	執行ノ手續 〔被告人ニ正本ヲ示 シ際本ヲ下付ス〕	家宅搜索ヲ爲 シタル時ハ其 事由	勾引スルコト能 ハサル時ハ其 事由	右之通取扱候也 明治 年 月 日 〔巡查又ハ憲兵氏名印〕
--------------------------------------	--------------	-------------	--------------------------------	------------------------	-------------------------	------------------------------------

〔檢事官印〕 勾 留 狀

〔住所身分職業〕

〔氏 名〕

〔若シ氏名分明ナラサ
ルキハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付治罪法第
百二十六條ノ規則ニ從ヒ〔何
所〕監倉へ勾留ス可キ者也
但本人潜匿シタル時ハ家宅
ヲ搜索ス可シ

明治 年 月 日
何裁判
所之印

〔何〕裁判所
豫審判事〔氏名印〕
書 記〔氏名印〕

勾留シタル被告人 ノ署名捺印若シ能 ハサル時ハ其事由	執行シタル月 日時	執行シタル場所	執行ノ手續 〔被告人ニ正本ヲ 示シ際本ヲ下付ス〕	家宅搜索ヲ爲 シタル時ハ其 事由	勾留スルコト能 ハサル時ハ其 事由	右之通取扱候也 明治 年 月 日 〔巡查又ハ憲兵氏名印〕
----------------------------------	--------------	---------	--------------------------------	------------------------	-------------------------	------------------------------------

〔檢事官印〕 收 監 狀

〔住所身分職業〕

〔若シ氏名分明ナラサ
ルキハ容貌體格等〕

右〔云々〕ノ事件ニ付取調ヲ爲

收監シタル被告人 ノ署名捺印若シ能 ハサル時ハ其事由	執行シタル月 日時	執行シタル場 所
----------------------------------	--------------	-------------

シタル處本罪刑法第(何)條ニ該ル可キ者ト思料ス依テ檢事ノ意見ヲ聞キ(何所)監倉ニ收監ス可キ者也

但本人潜匿シタル時ハ家宅ヲ搜索ス可シ

明治年月日 何裁判所之印

(何)裁判所

豫審判事(氏名印)

書 記(氏名印)

執行ノ手續

(被告人ニ正本ヲ示シ謄本ヲ下付ス)

家宅搜索ヲ爲シタル時ハ其由

收監スルヲ能ハサル時ハ其事由

右之通取扱候也

明治年月日時

(巡查又ハ憲兵氏名印)

宣誓書

(何々ノ)事件ニ付愛憎畏懼ノ心ナク總テ

正實ニ陳述ス可キヲ誓フ

通譯

明治年月日

(通事) (氏名印)

第四節ノ二 豫審判事令狀ヲ巡查ニ帶行

セシムル場合

○十五年四月司法省丁第廿四號達

左ノ通豫審判事ニ及内訓候條此旨相達候事

輕罪裁判所豫審判事

治罪法第百三十四條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ巡查ヲシテ令狀ヲ他管ニ帶行セシムルハ上告事件殊ニ急速ヲ要スル時ニ限り輒ク其處分ヲ爲ス可キ者ニアラス又第百三十五條ノ場合ニ於テ豫審判事ヨリ人相書ヲ發シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲スヘキヲ請求スル者ハ專ラ重大ノ罪ヲ犯シタル被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人ニ對シテ發スル者ニ有之被告人所在ノ地ヲ覺知スルヲ能ハサル時ハ罪ノ輕重ヲ問ハズ悉ク人相書ヲ發スル者ニアラサルナリ此等ハ兼テ注意アル可キ事ナレト猶ホ誤解無之様爲念此段及内訓候也

第四節ノ三 在外國公使館ノ内國人ニ發

スル令狀

○十六年三月司法省丙第壹號達

刑事裁判上在本邦外國公使館ニ備ハレタル内國人ニ對シ發スヘキ令狀ハ明治七年第百貳十八號公達ニ據リ公使館ニテ唯諾ノ上執行セシムヘキハ勿論ニシテ其唯諾ヲ經ルノ手續ハ明治十四年第五十三號公達ノ旨モ有之ニ付大審院并裁判所ハ其專柄ヲ明記シ當省へ申出テ指令ノ上其令狀ヲ發シ又警視廳府縣ニ於テハ其長官ヨリ外務省へ申出右唯諾ヲ經ルノ手續ヲ了シ令狀ヲ執行セシム可キ義ト心得ヘシ爲念此旨相達候事

但シ本文令狀執行者ハ專ラ明治七年第百二十八號公達ノ旨趣ニ據リ聊不都合ノ取計無之様厚ク注意セシムヘシ

第五節ノ一 既決囚ノ逃走者ニ對スル令狀

○十四年十二月司法省丙第二十號達

新法實施後ハ既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル刑法第六十二條ノ令狀ハ總テ其刑ノ執行ヲ爲ス他ノ始審裁判所檢事ヨリ發スル儀ト可

心得此旨相達候事

○十五年四月司法省丙第十四號達

既決囚ノ逃走シタル者ニ對シ發スル令狀ノ義ニ付ニテ明治十四年内第二十號ヲ以テ相達置候處始審裁判所々在ノ地ヲ除クノ外ハ更ニ其刑ノ執行ヲ爲ス地ノ警部ニ於テ令狀ヲ發スル儀ト可心得此旨相達候事

○十七年六月司法省丙第貳號達

已決囚ノ犯罪ニ付キ之ヲ裁判所ニ呼出シ審理ノ未刑ノ言渡ヲ爲ス場合ニ於テハ明治十五年當省丙第八號達ニ依リ檢察官ヨリ其宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送達スルハ勿論自今已決囚ニ對スル其他ノ宣告ニ付テモ其豫審ニ係ルト公判ニ係ルトト問ハス書記ヨリ宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ致送シ又證人トシテ出廷セシメタル已決囚用濟ニ至リタル時ハ亦書記ヨリ其旨ヲ司獄官ニ報知ス可キ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

第五節ノ二 既決囚ノ逃走者ニ對スル逮捕狀發付手續

○十五年二月司法省丙第六號達

始審裁判所檢事ヨリ既決囚ノ逃走シタルニ對シ逮捕狀ヲ發スル手續ハ左之通心得可シ此旨相達候事

第一條 逮捕狀ニハ典獄ノ報知書ニ依リ第二號書式ニ準シ逃走シタル囚徒ノ本籍身分氏名人相等ヲ詳記ス可シ

但管轄地ノ内外ニ拘ハラス急遽ノ際巡查ヲシテ令狀ヲ帶行セシムル時ハ人相ヲ記載セサルモ妨ナシ

第二條 管轄地外ハ令狀ヲ警察署又ハ警察分署ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第三條 管轄地外ハ第一號書式ニ準シ人相書ヲ作り之ヲ始審裁判所檢事ニ送致シテ逮捕ノ處分ヲ囑託スルコトヲ得囑託ヲ受ケタル檢事

ノ該人相書ニ依リ自己ノ氏名ヲ以テ更ニ逮捕狀ヲ作り之ヲ管轄地内ノ警察署又ハ警察分署ニ配付シテ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ

第四條 司法警察ニ於テ逮捕シタル囚徒ヲ受取タル者ハ之ヲ管轄檢事ニ送致シ檢事ハ其旨ヲ囑託ヲ爲シタル檢事ニ照會シ別段ノ事由

アルニ非サレテ逮捕ノ地ニ於テ刑ノ執行ヲ爲スヘシ
(人相書逮捕狀書式略之)

第六節 民事詞訟ニ關スル告訴

○十一年十月司法省丙第九號達

民事審理中及ヒ裁判宣告後該事件ニ付刑事ノ告訴ヲ爲シタル場合民事之審理ヲ中止シ又ハ罪證明ナルキハ裁判執行ヲ停止スヘキノ求メヲ爲ス可シ此旨相達候事

○第三款

第一節 重罪裁判所ノ區劃

○十六年九月第三十三號布告

明治十四年^{十二}第七十八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始審裁判所内管ヲ以テ一區劃ト定メ各其地名ヲ冒シ某重罪裁判所ト名稱ス

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ從前ノ通

第二節ノ一 重罪裁判所長

○十六年一月第三號布告
始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ開クハ當分ノ内始審裁判所長ヲ以テ其裁判所長ト爲スコトヲ得

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ儀ハ從前ノ通タルヘシ

第二節ノ二 陪席判事補充判事

○十四年十月第五十五號布告
治罪法第七十三條末文陪席判事第七十九條第二項補充判事ノ儀當分其裁判所長又ハ院長ノ臨時指定スル所ニ任シ候條此旨布告候事

第三節 換輕禁錮ノ命令

○十五年十月司法省丁第五十三號達

罰金ヲ禁錮ニ換フル儀ニ付神奈川重罪裁判所判事荒木博臣ヨリ別紙甲號ノ通伺出候ニ付乙號之通及指令候條爲心得此旨相達候事

甲號

罰金ヲ禁錮ニ換フル義ニ付伺

重罪裁判ニテ罰金ノ言渡ヲ受ケタル者其限内ニ納完セサル時ハ刑法第二十七條ニ照シ輕禁錮ニ換フヘキ處重罪裁判所閉廳後ハ(始審裁判所ニ於テ開キタルキ)右禁錮ニ換フル事ヲ檢察官ノ求メニ因リ其始審裁判所ノ所長判事ニテ之ヲ命シ候様致度右ハ差掛リ候事件有之候間至急御指命相成度此段相伺候也

神奈川重罪裁判所

明治十五年九月十八日

判事 荒木博臣 印

司法卿大木喬任殿

乙號

伺之通

明治十五年九月廿六日

第四節 輕罪控訴規則

○十八年一月第二號布告

明治十四年^{十二}月^{十二}第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ牴觸スル條件ハ當分

ノ内施行セヌ

第一條 控訴ハ治罪法中本按ノ裁判言渡前ニ許シタルモノト雖モ總テ本按ノ裁判言渡シアリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス
第二條 控訴ノ期限内ハ控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲スコトヲ得但對手人控訴ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

控訴ヲ爲サスシテ直チニ上告ヲ爲シタルトキハ原裁判言渡ニ對シ更ニ控訴ヲ爲スコトヲ得ス

第三條 被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條 治安裁判所ニ於テ爲シタル輕罪ノ裁判言渡ニ對スル控訴ハ管轄輕罪裁判所ニ之ヲ爲スヘシ其控訴ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ治罪法中輕罪ノ控訴ニ付キ定メタル規則ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

第五節 高等法院ヲ開カサルキノ裁

判

○十六年十二月第四拾九號布告

治罪法第八拾三條ニ記載スル事件ニ付高等法院ヲ開カサル時ハ通常裁判所ニ於テ裁判スルコトヲ得

○第四款

第一節ノ一 空知集治監囚人犯罪

○十五年八月第四十一號布告

空知集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ
但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

第一節ノ二 樺戶集治監囚人犯罪

○十五年三月第十六號布告

樺戶集治監ノ囚人(假出獄免幽閉ノ者トモ)罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ
但重罪ハ函館重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

第二節ノ一 沖繩縣重罪犯

○十五年七月第三拾三號布告

明治十四年(十二月)第七十八號ヲ以テ重罪裁判所管轄區畫布告候處
沖繩縣管内重罪犯處分ノ儀ハ當分ノ内同縣ニ於テ審訊シ證憑擬律按
テ具ヘ長崎控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後宣告スヘシ治罪ノ手續ハ便宜
ノ取計ヲ爲スコトヲ得

第二節ノ二 樺戸空知集治監囚人重罪犯

○十六年十一月第三拾八號布告

樺戸空知兩集治監ノ囚人假出獄免幽罪ヲ犯シ重罪ニ該ル者ハ當分ノ
内札幌始審裁判所ニ於テ明治十五年六月第三拾號布告ニ準シ處分スヘシ

第三節 集治監囚人訊問

○十五年十二月司法省丙第三拾四號達

樺戸及空知ノ集治監ニ拘禁中ノ囚人ニ對シ訊問ヲ要スル等ノトアレ
ハ本年第十六號同第四拾一號公布ノ趣モ有之ニ付該監司獄官ヘ囑托
スルヲ得ヘキ儀ト心得ヘシ此旨相達候事

第四節 札幌根室裁判所治罪手續

○十五年六月第三十號布告

札幌根室ノ各始審裁判所ニ於テハ當分ノ内治罪ノ手續便宜取計且重
罪犯ハ之ヲ審訊シ證憑擬律按テ具ヘ函館控訴裁判所ノ批可ヲ得テ後
宣告スヘシ

○十四年十二月第七十九號布告

各裁判所ノ位置及ヒ管轄區畫之義本年(十月)第五十三號ヲ以テ布告
候處北海道(函館始審裁判所管内ヲ除ク)并ニ沖繩縣ノ儀ハ當分從前
ノ通其所轄ノ官廳ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜ノ取計ヲ爲スヘシ
但控訴ノ儀北海道ハ函館控訴裁判所沖繩縣ハ長崎控訴裁判所ノ管
轄ニ屬ス

第三章

○第一款

第一節

無能力者法律上ノ代人民事
擔當人

○十四年十二月第七十三號布告

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通

無能力者

一未丁年者

二妻タル者

三白痴瘋癲人

四治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

一未定年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人

二夫タル者

三白痴瘋癲人ノ保管者

四治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

一未定年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者

二夫タル者

三白痴瘋癲人ノ保管者

四雇主(但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時)

第二節 海上路程ノ猶豫

○十五年二月第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ナ以テ一日ヲ加フルモノト定ム

○第二款

第一節 巡查及兵員要求使用手續

○十四年九月第八十二號達

司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヲ得

第二節 所在巡查使用

○十四年十二月司法省丙第十五號達

治罪法實施ノ上ハ豫審判事檢證及ヒ物件差押ノ事件ニ付急速ヲ要スル場合直ニ巡查ヲ同行シ又ハ所在ノ巡查ヲ使用スル儀モ可有之候條豫テ可達置此旨相達候事

○第三款

第一節 書記局訟庭等掌務心得

○十四年十月司法省丁第十八號達

書記局其他訟庭等ノ心得書別紙ノ通相達候事

書記局其他訟庭等ノ掌務心得書

第一條 書記局諸般ノ事務ハ豫メ其主掌ヲ定メ或ハ之ヲ定メサル等實際ノ便宜ニ從フ(十五年十月同省丁第五十五號達改正)

第二條 訟庭ノ取締被告人扣所ノ看守ハ巡查獄卒等ヲシテ之ヲ掌ラ

シムヘシ

第三條 訴訟口詰ハ雇員ヲ以テ之ニ充テ訴訟人呼入其他訟庭ニ關スル雜事ノ使用ハ小使ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第四條 門候ヲ置クト否トハ其廳ノ便宜ニ任ス若シ之ヲ置クトキハ雇員又ハ小使ヲ以テ之ヲ掌ラシム

但東京各裁判所ハ此限ニ在ラス

第五條 宿直ハ等外吏員雇員等ニテ之ヲ務メシメ在宅當番(退廳後ヲ云フ)ハ判任官ニテ順次之ヲ務メシムヘシ

但東京裁判所ハ此限ニ非ラス

第二節 公庭ノ取締

○十四年十月第八十六號達

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公庭取締ノ使用ニ供スルヲメ其院長所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒トシ公庭ニ入り看護セシムヘシ此旨相達候事

○第四款

第一節 裁判傍聽

○十五年三月司法省丁第二十號達
裁判傍聽ノ義ハ官民ヲ擇ハズ渾テ傍聽席ヘ相廻シ可申此旨相達候事
但外國人ニシテ公然ノ照會ヲ經タル者ハ此限リニ在ラス

第二節ノ一 司法警察官ノ證人

○十五年三月司法省丙第十號達
治罪法第二百八十五條ニ從ヒ調書ヲ作りタル司法警察官ヲ證人トス
ルキハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書
記ノ次席ニ着テ陳述セシム可シ

但旅費日當ヲ請求シタル時其金額ハ雜收入トシテ大藏省ヘ納付ス
可シ

第二節ノ二 諸官吏ノ證人

○十五年六月司法省丙第二十二號達
治罪法第九十六條ニ從ヒ告發シタル官吏ヲ證人トシテ公廷ヘ呼出ス

時ハ本年本省丙第十號達ニ準シ處分スル義ト心得可シ此旨相達候事

但巡查及ヒ等外吏ノ着席ハ此限リニアラス（但書十五年十月同省

丙第三十一號達改正）

○十七年六月第五拾七號達

官吏職務上ニ係リ刑事裁判ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スル時ハ治罪
法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルコトヲ得ルト雖モ被告事件無罪又ハ免
訴トナリタル時ハ請求セザル儀ト心得可シ

○第五款

第一節ノ一 判事檢事書記印章

○十四年十一月司法省丁第二十一號達

法律上判事檢事書記等署名捺印ヲ要スル節相用フヘキ印章ハ左ノ雛
形ニ照シ各自彫刻シ費用ハ官費支拂ニ相立候儀ト心得此旨相達候事

官	勅任方九分 曲尺
氏名	奏任方七分 曲尺
	判任方六分 曲尺

書記ハ裁判所書記某ト刻ス字體ハ篆楷適宜タルヘシ但認易キヲ要ス

第一節ノ二 各裁判所ノ印章

○十四年十二月司法省丁第三十號達

裁判所印章ノ儀來明治十五年一月一日以後左ノ通改正候條各廳ニ於テ調製シ印鑑ヲ以テ可届出此旨相達候事

印章雛形

方曲一尺五分
何々
控訴
裁判所

控訴
審始 裁判所各一
治安 類ヲ彫刻ス
輕罪
違警罪

字體ハ篆書ヲ用ヒ認易キヲ要ス且文字ノ數ニ據リ或ハ「之印」ノ字ヲ刻スルモ妨ケナシ

○十五年一月司法省丁第十一號達

重罪裁判所印章左ノ雛形ノ通相定候條該裁判所開設ノ地方所在（控訴始審）裁判所ニ於テ調製シ常ニ備置候様可致此旨相達候事

印章雛形

方曲一尺五分
某々
重罪
裁判所

名稱ハ明治十四年
第七十八號布告ニ
據ル

字体ハ篆書ヲ用ヒ成ヘク認易キヲ要ス且地名文字ノ數ニ依リ或ハ「之印」等ノ字ヲ刻スルモ妨ケナシ

○十六年一月司法省丁第一號達

支廳ノ印章左ノ通相定候條各廳ニ於テ調製シ印鑑ヲ以テ可届出此旨相達候事

印章雛形

方曲一尺
某始審
裁判所

始審裁判所支廳
各一類ヲ彫刻ス
輕罪裁判所支廳

五分 某支廳

字体ハ篆書ヲ用ヒ認メ易キヲ要ス且文字ノ數ニ據リ或ハ(之印)等ノ文字ヲ刻スルモ妨ケナシ

○十四年十二月司法省丁第二十七號達

本年第五十四號公布ニ依リ治安裁判所ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クハ其管轄輕罪裁判所ノ名稱ヲ用ヒ其印ヲ捺シ某治安裁判所ニ於テスルヲ附記スヘシ左ニ雛形相添ヘ此旨相達候事

書式雛形

於八王子治安裁判所

橫濱輕罪裁判所

印章雛形

橫濱輕罪

裁判所

○十六年一月司法省丁第二號達

支廳管内ニ在ル治安裁判所(支廳所在地ヲ除ク)ニ於テ輕罪裁判所ヲ開クトキ用ユヘキ印章ハ明治十四年當省丁第廿七號達ノ例ニ據リ治安裁判所ニ於テ所轄支廳ノ印章ヲ調製シ押用スル義ト心得ヘシ此旨相達候事

但彫刻ノ上ハ印鑑ヲ以テ届出ヘシ

第二節 犯人證人ノ拇印

○十四年十二月司法省丙第十六號達

治罪法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ依リ拇印爲致候儀ト心得ヘシ此旨相達候事

第四章

○第一款

第一節 勅奏任官華族帶勳有位者犯罪

○十五年三月司法省丙第十一號達

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

別紙

司法省

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルコトヲ得此旨相達候事

明治十五年三月二十二日

○十六年五月司法省丙第二號達

勅奏官華族并ニ有位帶勳者犯罪取扱方ノ儀ニ付別紙ノ通太政官へ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

但御指令文中十五年三月二十二日附御達ハ同年當省丙第十一號達ト可心得事

勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀伺

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ犯罪取扱方ノ儀ニ付テハ明治十五年三月二十

二日附ヲ以テ御達有之候處其罰金ニ處スヘキモノト雖モ或ハ本人ヲ出廷セシムル場合モ有之且又拘留ノ刑ニ處シ及ヒ罰金科料ヲ納完セサル節ハ則換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ニ處スヘキ儀モ有之候條右本人ヲ出廷セシムル場合及ヒ換刑シテ輕禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スヘキ時ハ矢張其時々奏聞可致儀ト相心得可然哉此段相伺候也

明治十六年三月三十一日

司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

朱書

伺ノ通

但十五年三月二十二日附其省へ達中帶勳有位者トアルハ勳六等以上從六位以上ヲ指シタル儀ト相心得事

明治十六年五月八日

第二節 帶勳者身分取扱

○十五年十一月司法省丁第五十六號達

内國ノ勳章ヲ賜リタル外國人並外國ノ勳章ヲ佩ヒタル内國人身分取

扱ノ儀ニ付別紙ノ通太政官へ相伺候處朱書ノ通御指令相成候條爲心得此旨相達候事

内國勳章ヲ賜リタル外國人並外國ノ勳章ヲ佩ヒタル内國人身分取扱ノ儀伺

内國ノ勳章ヲ賜リタル外國人ハ内國人ノ帶勳者ト取扱ヲ同スヘキハ固ヨリ言ヲ踈タス亦内國人ニシテ外國ノ勳章ヲ帶ル者ニ於テモ勳章ハ外國ノ勳章ナレトモ其佩用ヲ許奪スル等ハ我政府ノ處置ニ係ルノミナラス其外國ノ勳章ヲ受ケタル者ハ該勳章ニ相當スルノ榮譽ヲ有スレハ之ニ相當スルノ取扱ヲ爲スヘキ者ト存候得共右ハ身分取扱上ニ關係スルコトニシテ別ニ可據法例ナキヲ以テ相伺候條果シテ其取扱ヲ内國帶勳者ト等クス可キ義ニ候ハ、外國ノ何々勳章ハ内國ノ何々勳章ニ相當スル者ナルヤ此段合テ至急何分ノ御指令有之度候也

明治十五年五月廿六日

司法卿大木喬任

太政大臣三條實美殿

朱書

伺之趣 第一項 伺ノ通 第二項 外國ノ勳章ヲ受クル内國人ハ其受佩ヲ許否スルニ止ルモノニシテ身上特別ノ取扱ヲ要セサル義ト心得ヘシ

第三節 帶勳者公權剝奪及停止ノ届出

○十五年三月司法省丙第九號達

帶勳者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタルハ其罪狀並刑名宣告文ノ寫ヲ以テ當省へ可届出此旨相達候事

但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章並年金票共収奪ノ上當省へ差出スヘク候事

第三節ノ二 恩給ヲ有スル者公權剝奪及停止ノ届出

○十八年一月司法省丁第壹號達

自今官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時ハ直ニ其宣告文寫書ヲ添當省へ可届出此旨相達候事

但(十八年二月司法省丁第六號達ニ因リ消滅ス)

○十八年五月司法省丁第十三號達

官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時其届出方ノ儀本年丁第一號ヲ以テ相違置候處明治八年太政官第四十八號達陸軍武官傷痍扶助及死亡者祭葬家族扶助概則並ニ同年太政官第四百四十八號達海軍退隱令ニ據リ扶助料又ハ退隱料ヲ受クル者モ右達ニ準シ當省へ可届出此旨相違候事

第四節

恩給並扶助料ヲ有スル者公權剝奪及停止ノ通知

○十六年四月司法省丁第十五號達

明治八年第四百四十八號公達海軍退隱令並ニ明治九年第九十九號公達陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ受ケ並ニ恩給ヲ有スル軍人ニシテ治罪法第二百七十三條ニ據リ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アル

其都度直ニ大藏省へ通知可致此旨相違候事

但新法實施已後は迄本文ノ處分ヲ受ケタル者有之候ハ、其旨直ニ大藏省へ通知可致事

第四節ノ二 醫師醫業ニ關スル犯罪ノ通知

○十五年八月司法省丁第四十二號達

年八月第三十九號公布ニ依リ今般内務卿ヨリ照會ノ都合モ有之候ニ付テハ自今醫師タル者醫業ニ關スル犯罪有之致處斷候節ハ其都度該宣告文謄本相添内務省へ通知候様可致此旨相違候事

參看

○十五年八月第三十九號布告

醫師タル者醫業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ中央衛生會ノ審議ヲ經内務卿ニ於テ其業ヲ停止若クハ禁止スルコトヲ得但其事開業免許ヲ得ルノ前ニ在リト雖本項ニ準シテ處分スルコトアルヘシ

○第二款

第一節

被告人責付手續

○十四年九月第四十七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責附スルハ左ノ手續ニ從フヘシ此旨布告候事

第一條 被告人ヲ責附スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應ル出廷セシムヘキノ証書ヲ其裁判所書記局ニ差出サシムヘシ

第二條 責附中被告人ヲ呼出ストキハ出延ヨリ二十四時前ニ其通知ヲ爲スヘシ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ責附ヲ取消スヘシ

第二節

保釋責付取締心得

○十六年十一月司法省丙第八號達

保釋責附中ノ被告人取締方心得ノ儀ニ附左ノ通各裁判所ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

丁第三十一號

保釋責附ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ儀ニ付保釋責附ヲ爲ス際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ

第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ届置ク可キコトハ言ヲ俟タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルコトヲ得ス

若シ已ムコトヲ得サル事由アルハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖居住所外ニ於テ一泊以上滞在スルハ滞在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク可シ

若シ同居人アラサルハ其住所ノ地ノ戸長ニ届置ク可シ

第三條 代言人辨護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他議會集會等公然ノ場所ニ參會スルヲ得ス

第四條 治罪法第二百一十一條ニ適當スル者及ヒ前條ノ規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保釋ヲ取消ス可シ其責

附ヲ受ケタル者モ亦同シ

第三節 商船内犯罪取扱規則

○十四年十二月第六十五號布告

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付假ニ訊問檢証ノ處分ヲ爲シ且證據及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ集取シ調書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ
前項ノ場合ニ於テハ立會人貳名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ證據及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡ス可シ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ之ヲ引渡ス可シ

第四節 在朝鮮國罪犯取扱規則

○十六年十月第三十三號布達

朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則別紙ノ通協議決定ス別紙

約定シタル朝鮮國海岸ニ於テ犯罪ノ日本國漁民取扱規則

第一條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ日本國人朝鮮國ノ法禁ヲ犯シタルトキハ水陸共左ノ箇條ニ照シ取扱フヘシ

第二條 朝鮮國官吏ハ法禁ヲ犯セル日本國人ヲ取押ヘタルトキハ其罪証ヲ具録シ之ヲ添テ其日本人ヲ最寄開港場ノ日本領事官ヘ引渡シ相當ノ處分ヲ要求スヘシ日本領事官ハ速ニ其要求ニ應シ之ヲ審查シ照律處斷スヘシ但シ朝鮮國官吏取押ヘ又ハ護送ノ際苛虐ノ取扱ヲナスコト無ルヘシ

第三條 犯罪ト認ムヘキ日本人ヲ海陸孰レヨリ護送スルモ朝鮮官吏ノ勝手タルヘシ但シ成丈速カニ護送シ事故ナクシテ徒ニ罪犯ヲ其地ニ淹留スヘカラス

第四條 朝鮮國ノ約定海岸ニ於テ罪ヲ犯セシト認ムル日本人ヲ海路ヨリ護送スル時ハ朝鮮官吏日本人ノ船舶ニ乗込或ハ別船ニ在テ之

不苦ヤ右差掛リ
ル事モ有之候條
至急御指令相成
此段相候也
明治十六年八月三十日
明治十六年九月十九日

指令 伺之通
明治十六年九月十九日

第九十三條以下參照

○司法省
椽木縣ヨリ犯罪
置捨品中ニ付物
犯罪ノ証憑トス
キ物件アリ警察
ヨリ之ヲ檢事ニ
致セシメテ未
捕ニ就カスル
訴期満免除ノ
ヲ經過シタル
其物品ハ行政
處分ニ屬スル
官ノ候哉果シ
官ニ候分ニ屬
官ノ處分ニ屬
官ノ候分ニ屬

發見シタル時ハ檢察官ヨリ直チニ之ヲ還付スヘシ此旨爲心得相達候事
但檢察官ニ於テ保存ス可カラサル物件又ハ保存スルニ付費用ヲ
要スヘキ者ト思料スル時ハ公賣ノ處分ヲ爲シタル上其代金ヲ保
存シ置クヘシ

○明治十八年七月司法省丙第六號達

沒收物件處分ノ儀ニ付左ノ通太政官ハ相候處朱書ノ通御裁令相成
候條自今處分方心得爲メ此旨相達候事

沒收物件處分之儀ニ付伺

刑事裁判上沒收ニ係ル物件ハ破壞廢鐵(燒棄之分ヲ除ク)之後若クハ原形之儘
總テ公賣ニ付シ其代金ハ雜收入トシテ國庫ニ納付ス可キノ成規ニ有
之候處今般警視總監大迫貞清ヨリ別紙之通上申相成候因テ審按スル
ニ犯罪ノ用ニ供シタル器具ニシテ異種ニ屬スル者ノ如キハ警察官ニ
於テ豫テ其製造法及用方等ニ注意シ置クルハ犯罪捜査上便利ヲ得ル
コト尠カラズ犯迹ニ因テ使用ノ器具如何ヲ推知シ隨テ犯人ノ誰タルコ
トヲ發見スルノ場合亦之レナントセサレハナリ且右異種ニ屬スル器具

モノトセハ前顯ノ
物品ハ勿論犯罪
查ノ爲メ檢事ニ
テ直チニ中事主
ル物件中事主不
明ナルモノ期限
期満免除ノ期限
過キタル警察官
事ヨリ相成ヘキ
渡シ相成ヘキ筋
之レ相成ヘキ筋
段相候條至急御
指揮ヲ仰キ候也
明治十六年九月八日
右指令 伺之通
明治十六年九月十九日

ノ如キハ其儘人民ニ私有セシムルハ其危險測ル可カラサルヲ以テ
必ス先ツ破壞スルニ非サレハ公賣ス可カラサルモノトス已ニ之ヲ破
壞センカ餘ス所ハ唯其原質物ノミ之ヲ公賣スルモ管ニ手數ヲ煩ハス
ノミニシテ巨額ノ收入ヲ得難キヤ明瞭ナリ就テハ自今檢察官ニ於テ
犯罪ノ用ニ供シタル物件ノ異種ニ屬スル者其他警察上注意ヲ要スル
モノト認メタルハ之ヲ警視廳若クハ警察署ニ交付シ保存セシメ候
條致度右ハ雜收入ニモ關係候儀ニ付一應相候條至急何分ノ御指令
相成度候也

明治十八年六月九日

指令

(朱書)

伺ノ通

明治十八年七月六日

犯罪ノ用ニ供シタル器具之儀ニ付上申

犯罪ノ用ニ供シタル器具ノ種類如何ヲ詳知スルハ犯跡鑑定等警察上